晉書土佐日記纂注　上

坂田諸潔閲
楢崎隆存編

首書土佐日記纂注

定價五拾錢

版權免許

桑林堂梓

緒言

今を距ること十四年前即ち庚午の冬予東京を發して將に郷に還らんとを一日紀貫之の著せる土佐日記を讀むたまゝ之に諸注を抜萃し草稿二卷を得たり迺ち友人淺潔に就て其検閲を請ふ諸潔より國學に善き予の意を賛け一雌黄を下を而して歸期已に迫る竟に西に航を以來草稿を篋底に蔵し他見を禁す今茲五月書肆之を刻せんこと然謀ること不可止むを得を為めに浄書校正し尋て剞劂氏に授を名て首書土佐日記纂注と云乃ち友人

下學集に
鶯宿梅の
旧跡は二條也
林光院なるべし
志賀〳〵るる
應仁の後
二條の等
持奇の傳也

移〳〵又相國寺
の中よ殺
〳〵植志
〳〵〳〵
常名梅の花
白く八重咲を
點文〳〵
薫り
珠よ際〳〵

諸潔ノ心を盡せは雌黄を後亞ま傳へて忘れさら
ましかは今在はたゝ諸潔姓ハ坂田日向の人元神祇
省出仕明治十年西郷隆盛等と謀反し終に斬罪の
刑に處せらる吁嗟甚人無し雄も雌黄猶ち亞ク矣
回顧それハ涙潸然曰て之ノ経歴を述ふは如此

明治十六年九月二日　著者識

首書　土佐記纂註卷上

日向　坂田諸潔　閲

攝津　楢寄隆存　纂注

○紀貫之ノ傳

紀ノ貫之（ツラユキ）父ヲ望行（モチユキ）ト云藏人（クラウド）トナル和歌ヲ以テ称セラル貫之素ヨリ書ニ紀氏系圖和歌ヲ善クシ頗ル其奴ヲ得タリ清案欽八雲御抄歌大概延喜中御書所預ケトナル紀氏系圖古今和歌集序越前ノ權少掾内膳典膳少内記ヲ歴テ大内記ニ轉シ從五位下ニ叙セラレ加賀美濃介トナル延長中大監物右京亮ヲ拜ス歌仙傳土佐守トナル袋草子ニ延喜八年

○貫之ノ傳ハ歌仙傳作者部類古今集目録和歌色葉集羅山先生文集大日本史百人一首一夕話等ニ出ツ

○古今集目録貫之カ父祖ヲ載セス歌仙傳ニモ先祖未詳トアリ是ヨリ考レレハ紀氏系圖ニ記

スルトコロ是乎非乎知ルベカラズ

○友則。凡河内躬恒壬生忠岑カ傳ハ大日本史二百十九巻ノ歌人列傳ニ出ル

○枕草紙春曙抄云あはとせ〳〵の明神貫之ヶ馬のわつ〳〵ひけるゆゑ明神のやはせをふとて哥

トスルハ誤リ也承平中任満テ京都ニ帰ル十訓抄袋草子天慶中玄蕃頭トナル従五位上ニ進ム木工權頭ニ遷ル歌仙傳従四位下ニ叙セラル近江日野大嵩社天慶八年梁牌九年ニ卒ス歌仙傳古今和歌集目録初メ貫之疾ニ臥ス自ラ其起サルヲ慮リ歌ヲ作リ源公忠ニ寄セテ曰ク氏珥年須鶩美豆珥椰妬禮流都岐加牙餓阿流加奈岐加餓余珥古曽阿利計禮ト卒スルニ及テ公忠歌ヲ作リ之レヲ悼ム袋草子嘗テ姪ノ友則及ヒ凡河内躬恒壬生忠岑ト勅ヲ奉シテ古今和歌集ヲ撰ス本書序貫之家集八雲御抄勅撰次第貫之序ヲ作ル世其和歌ノ大體ヲ論スト称ス栄萃物語八雲御抄書成ル之ヲ上ル

よゝてをはりんゐやめゐひりんいとおゝ〳〵○貫之家集云きけ〳〵ゐ〳〵くこて加奉リのおはしたゐてゐハゝゐむはのたぬへくゐりらふゝころゐたもく人々立ゝはりて云これハこゝにいはすゝるかゝけ〳〵るふたゝふむゝしふろやしろもなくたるしも見へねどうゝてあるかゝなりけきくかゝるゐハいのりを

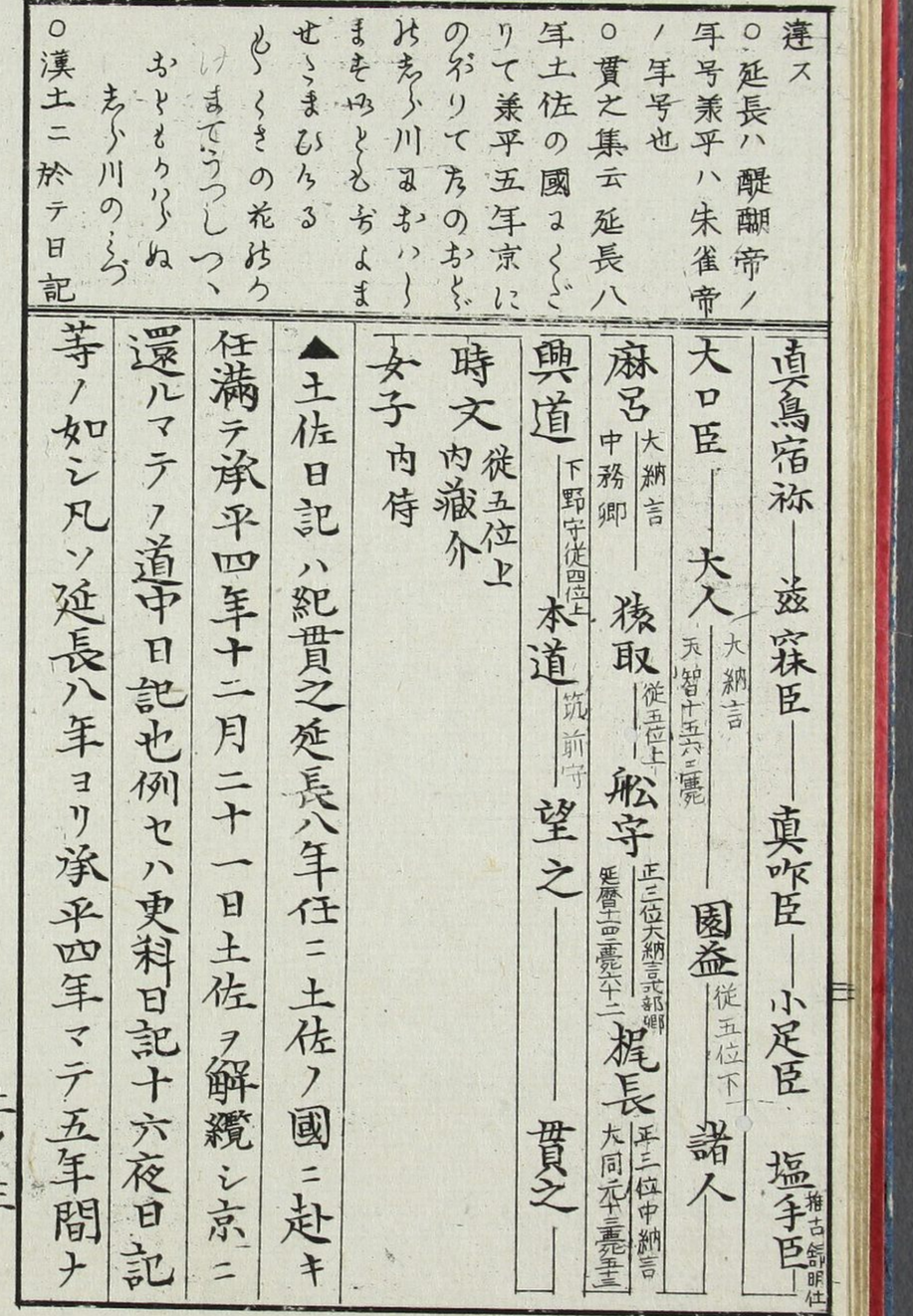
特旨貫之カ歌一百首ヲ採リ入レテ選ハシム顕昭古今集抄又萬葉集五巻ヲ撰ブ八雲御抄後又勅ヲ奉シテ新撰和歌集ヲ撰ブ尋テ任ニ土佐ニ赴ク既ニシテ京ニ還ル書未ダ進セス帝崩ス貫之序ヲ作リ時ノ奏御ニ及バサルヲ憾ム詞甚タ哀切ナリ新撰和歌集序十訓抄袋草子著ストコロ紀行一巻アリ名ケテ土佐日記ト云土佐日記世ニ傳フ嘗テ紀伊ニ赴ク夜和泉ヲ過ク騎ルトコロノ馬地ニ伏シテ進マズ貫之之レヲ怪ム人アリ告テ曰此地ニ蟻通シノ神アリ今禮ナクシテ而シテ過ク豈其怒リニ觸ルニ非ルヲ得ンヤ是ニ於テ貫之大ニ驚キ急ニ

なんもうすといふ
あみて人々もなは
れハなにわさもき
アあらいてかゝ
たゝ〜氣もなし〜や
そも〜伊の神〜う
きこへんと〜へハ
あり〜かしの神〜
いふをき〜てよゝ
たてまつりはるむ
ゑのこゝちやゝゐ
けり。冠池蟻通社
ノ北一町許街道ノ
傍ニ在リ紀貫行落
馬ノ古道ト云後世
往還ノ旅人ニ神崇
アリテ本社ハ街
道ヲ背ニシテ東向
ナリ
○孝元帝ハ人皇八
代ニ當ル在位五十
七年ナリ
○景行記ヲ考ルニ
屋主忍男武雄心命
二人ナリト記ス恐
クハ誤ナルヘシ
○古事記ニ武内宿
祢ヲ比古布都押之
信命ノ子ト記ス今
ハ然ラス評シテ云
クコノ系圖ハ古事
記ニモ書記ニモ相

馬ヨリ下リ盥漱シテ和歌ヲ詠シ而シテ謝ス歌ニ曰ク
河伎玖毛理阿邪米毛志羅奴於保存良珥阿利斗保志
乎婆於母布倍志邪波ト馬即チ進ムコトヲ得タリ貫之
家集袋草子源俊頼無名抄歌司異同アリ貫之カ馬地ニ伏シテ進マサリシ時其冠リ松枝ニカヽル今此処
ヲ冠淵ト云近ク和泉名勝図繪ニ出ル後人歌仙ヲ撰ブニ貫之ヲ推シテ
右行第一トス以テ柿本人麻呂ニ配ス三十六人撰袋草子称シ
テ和歌ノ祖宗トス其世ノ為ニ重セラルヽ此ノ如シ
源親房古今集序子ノ時文モ和歌ニ善シ女アリ内侍トナル
亦和歌ニ善シ村上帝ノ時清涼殿ノ梅樹枯ル帝人ヲ
シテ他ノ梅樹ノ移植スベキモノヲ索メシム而シテ

之レヲ西京ニ得タリ主人和歌ヲ書シ之レヲ樹枝ニ
繫ク歌ニ曰ク知余玖儺戾婆伊登毛加志虚志宇遇比
須能耶妬波登々波婆伊加我虚多閑年ト帝覽テ之レ
ヲ怪ミ人ヲシテ之レヲ問ハシム即チ内侍カ家也大鏡
拾遺和歌集ニハ紀家六帖ヲ著ス袋草子貫之ガ姪ニ友
移植セストテ云
則ト云アリ是亦和歌ニ善シ貫之ト名ヲ齊クス顕昭古今
集抄ニ能因カ家集ノ序ヲ引ク
世ニ傳フ本書序八雲御
抄勅撰次第
紀氏系図云孝元帝——彦太忍信命——屋主忍雄命
武雄心命——武内宿祢景行帝三年於紀伊国誕生仁徳円日生五十五年薨ス——木菟宿祢仁徳円日生

達ス
○延長ハ醍醐帝ノ年号兼平ハ朱雀帝ノ年号也
○貫之集云 延長八年土佐の國ゟ京にのぼりて侍のおとゝ
はゝそ川ゟおい〳〵まもなくよませたまひける
もゝくさの花ぢらけまてうつしつゝ
おとゝもろ〳〵ぬ
はゝそ川のゝ
○漢土ニ於テ日記



▲土佐日記ハ紀貫之延長八年任ニ土佐ノ國ニ赴キ任満テ承平四年十二月二十一日土佐ヲ解纜シ京ニ還ルマテノ道中日記也例セハ吏科日記十六夜日記等ノ如シ凡ソ延長八年ヨリ承平四年マテ五年間ナ

体ノ文ヲナシタルハ唐ノ李翺カ來南録也貫行之來南録ヲ見テ此書ヲカキシモノナルカ知ルベカラズ又宋ノ歌陽修カ于役志陸放翁カ入蜀記范成大カ驂鸞録吳舟録周心大カ癸辛録汎船録呂祖謙カ入越記方鳳カ金華游録元ノ郭天錫カ客杭日記等ノ日記体ノ文アレトモミナ貫之ヨリ後ノ書也兼平五年トアルハ五代

レハある人なゝ乃よとせいつゝもてゝハト云依テ明年二月十六日京ニ還リ前後六年ナレハあゝせのうちよみとせやそぢあまりんト云扱テ日記ヲ解スルニハ紀氏自ラノヲ女ニナシテ書レシコトヲ暫クモ忘ルヘカラズ何トナレバ日記ノ初メニをとこもすなる日記といふものを女もしてはんとするなりト云テコトヲウラワヘニイヒテ言ハノアヤヲナセルヲモテ專ラ興トシテ書タレハ也先ツ其證ヲ出サハ

発端
もゝくさの花ぢらけるを女もしてはんん

ノ後唐ノ末ニ當ル此時貫之既ニ此文ヲツクルヨロシク本朝文學ノ祖先ト云ヘシ古今文ヲカクニハ此日記ヲモテ亀鑑トスヘシ凡ソ此文ヨリサキニ古今集ノ序大井河行幸和歌ノ序ナトアレト古今集ノ序ハソノマヽニウケカタシ又大井川行幸ノ序ハヒタスラモロフシノ序文体ニナラヒタレバ今ハ取ラススベテカヽンニハ此日記又ハ伊勢物語ナトヲ拠トスヘシ

やゝ寒しなり

十二月廿二日 ふなぢるもどうまれたるむけまを

同日 ちゝうゝのほとゝめゝあぐれひの人家

同廿四日 ひとゝもどだゝ〳〵ぬゝあゝぐあゝそそも

同廿七日 ゝゝどなれどこのひうゝとすぐいふ

同七日 あをうまを思へどうひすゝぐ波のゝろき

ぞゝゐる

同九日 海をあるれどいはまとゝすぎぬ

同十六日 霜ぐるれおうぬゝぐゝいふなれど波の中ま

上ノ四

八月廿日 ふりくふ

同廿日 とうとゝとこの国とはいとことなるとのなれ

ど月のうげあおなぐこふとなるゝ見れば

同廿一日 春のうゝまま秋のこれたゝもちれるあうぐぞありける

同日 ゝうゝのりとる右ろき波をよそとぐいふ

二月朔日 いその波いをれぐとくまぬ貝のいろいきうゝ

同四日 女児のゝゑんるを親をきなゝあめぬべゝ

已上ノ文皆コトヲウラウヘニイヒテ言ハノアヤヲナス者者ヨロシク注意スベシ」コノ日記ノ中ニ在ル歌多シト雖モ自テ讀ミタル歌一首モナシ皆外ノ人

○本居宣長云
そもくこの日記の
注ハたゞ季吟の抄
ばかり世ふを考りて
そろまり事附注と
いふそのあることく
をバ考る人いく
すれなり今この
二つ共あるせ見る
ま季吟の抄ないへ
ることゞもく書
をひきたることな
とそのおもゝく
ゝ附注とこゝなる
るをきハそのに
附注をゝわけ

ノ歌ニナシテ書レタリ是亦一家ノ見込ナル乎又コ
ノ日記ヲ校合スルニハ紀氏自筆本定家卿ノ自ラ寫
サレシ本為家卿自筆本烏丸資慶卿自筆本コノ外ニ
妙壽院本吉寫本三本聞書見聞抄扶桑拾葉本群書類
従本附注本等ニ憑ルソモ〳〵此日記今日ニ至テハ九
百餘年ヲ経テ誤字脱文等少カラス中ニモ妙壽院本
古寫本ナト多ク真名ニ直シテ書ク中古ノ人云フ原
ハ假名ナリシヲ真名ニ直シソレヲ又讀ミヒガメテ
假名ニ寫シ其儘真名ニ改メナドセシコト度々ニシ
テ遂ニハ原本ノ意ヲ失ハント欲ストカヤ既ニ京極

るるのとこ抄おか
ゐれゝいゐれゝハ
ふくも見ぎるゐが
ことなゐりそそ
こゝゐあげゝる注
を見ても思ふ曽し
正月七日条書馬ぢ
るをいへる所ゐ附
注ふを延喜式をそ
き書るを抄ふを公
事根をのゝそゐり
同日をゝつゞゝを
うちてゝいふふゐ
附注ふを荘子をそ
のすゝそ考ゝるを
抄ふをおなじ荘子

黄門本ノ奥書ニ云フ文暦二年乙丑五月十三日己巳老病
中雖眼如盲不慮ノ外見紀氏自筆本蓮華院宝蔵本料紙白紙
不打無界高一尺一寸三分計廣一尺七寸二分計紙也廿六枚無
軸表紙續白紙一枚端聊折返不立竹無軸有外題土佐日記貫之筆
其書様和歌非列行定行書之聊有闕字歌下無闕字而
書後詞不堪感興自書写之昨今二日終功

桑門明静

紀氏廷長八年任土佐守在國載五年六年之由承平四
甲午五乙未歴三百一年紙不汚損其字又鮮明也不讀得所
々多只任本書也有朱印

をひきたるまどひけ
るホの文いろく本
書ゐたゞ〳〵るハあ
ふぬ書より　とゐ
てゐきとるなるべ
ゞ同十四日海神の
るをいへる条ゐ附
注ふゑ淮南子文選
書紀などとひかる
を抄ふハ太平記を
のくひけゐ同廿日
をのぞゑハ都とか
〳〵といふ条ふ附注
ふハ晋書をひきた
るを抄ふゑ幼童傳
とのミゑハ祭すこ

妙壽院本奥書云土佐日記以貫之自筆本故将軍舊物之重宝也今度密々自小河幕府借出之遂一覽依或人數奇深切書之古代之假字猶蝌蚪未憲臨寫有魚魯乎後見輩察之而已明應壬子仲秋候亜槐藤原

已上ノ文ヲ讀テ日記ノ誤謬ノ多キヲ推シテ知ルベシ（京極黄門自筆本貫之ノ自筆ノ本ヲ写セリト云即チ季吟ノ抄ノ本文也老人雑話ニ貫之自筆土佐日記ハ蓮華王院ノ宝物ニシテ定家卿之レヲ写シ連歌師玄的ニ傳フ後□家ニ納ム依テ定家卿委ク自巳ノ筆法ヲ以テ寫シ未ノ三校ハ貫之ノ書法ヲ知テセン逆文字ノ大キサ宇体ヲモ写シ跋ニ其趣キヲ記シテアリ貫之自筆本ハ今無シ且ツ其定家卿本ハ□家ヨリ□殿ヘマイラセケル由□ハロ傳ナリ

ゞ季吟法印のひそ
りに附注をさもり
とな〳〵バ附注より
まされるこゝハあ
りぬべ〳〵附注ゐお
よばざるこゝそある
べ〳〵ゞゞさるを上ゐ
あげさるごと抄の
〳〵こハ附注を祭ゐ
書籍などの引おく
れおかのるゑ季吟
法印の附注をと〳〵
きる證といふべし
○寛永本後ニ改メ
テ萬治三庚子初春
吉祥日秋田屋平左

凡ソ此日記ノ注解ト云モノハ古ヘヨリ九部アリト云先ヅ「土佐日記聞書」ハ著者審ナラス岸本由豆流ノ考証ニハ元和寛永間ニ成リシモノト云捨テ難キノ書也案スルニ日記注釈ノ始メナラン乎次ニ「土佐日記見聞抄」是レハ小野山隠士槃柴ノ記スルトコロニシテ年月ヲ載セス片假名ヲ以テ注ス是亦捨テ難キノ書也次ニ「土佐日記附注」是レハ人見卜幽ノ著ニシテ跋ニ萬治四年トアリ季吟ノ抄ノ跋ニモ萬治四年円年ナリ而メ附注本文ハ大概為家卿ノ本ニタカウモ抄モ解釈同シトアリ其著ノ成ル双方トモトコロスクナシ次ニ「土佐日記抄」是レハ北村季吟法

衛門板行トセシ本アリタヾ奥書ヲ改メタルノミニテコノ本ト少シモタガウナシ

○宇津保物語藏開ノ上ニソノ人ノ日記トアリ源氏物語繪合ニカノタビノ御日記トアリ又辨内侍日記ニ日記ノ涉双子三帖大内裏ノ頃中納言ノスケ殿ニアツケサセタマヒシヲトアリ又呂保殿歌合ノ記ニ

印ノ著ニシテ世ニ有名ナル書也次ニ「土佐日記首書著者審ナラス抄ト粗同シ次ニ「土佐日記注是レハ契仲阿闍梨ト縣居翁トノ説也ソレヲ藤原宇万枝カ記セリ鮮シテ曰ク縣居ノ説ハ自ラ發明スルニ見エ契仲ノ説ハ古書ヨリ拔萃セシニ見エ又一本アリ縣居翁ノ説ヲ宇万枝カ記シテ上田秋成カ序文ヲ加ヘタリ且ツ自ラノ説モ加フ次ニ「土佐日記打聞是レハ縣居翁ノ説ヲ揖取魚取カ自ラノ説ヲ加ヘタルモノ也

次ニ土佐日記考證是レハ岸本由豆流カ著ストコロニシテ例言ノ末ニ文化十二年十一月七日トアリ総

日記ハ女スラモスヘキ業ナランヨトアリ漢土ニハ王充カ論衡ニ上書日記ト云又老學庵筆記ノ巻三黄魯直有日記謂之家乘トアリ

テ巳上ノ七部ヲ拠トシテ著シタルモノニシテ間本居宣長真淵等説ヲ加フ次ニ土佐日記地理辨未タ予カ覽ザルトコロナレバ爰ニ記セズ今コノ纂注ハ巳上九部ノ説ニ自ラノ説ヲ加ヘ上下二冊トス看者其疎漏ヲ咎ル勿レ

今コノ本文ハ寛永二十年ニ風月宗智カ刊行スル本ニ従フ古写本ニ於テハ此説ニマサリタルコトモアレト素ヨリ写本ノコトナレハ證トスルニ足ラス依テ附注或ハ抄或ハ扶桑拾葉或ハ群書類従等ノ印本ヲ以テ之レカ校正ヲナスソモ〳〵原本ノ文中ニ

○和訓栞巻二云縣ヲヨメリ分ツト通セリ和名抄ニ縣々ヲガタ〳〵トヨミ諸縣ヲムラガタ山縣ヲヤマカタナトヨメリ○縣主ハ神武天皇ノ御代ヨリ見ヘタリ縣邑ヲ治ムル者ヲ云後カバ子トナレリ○國府ヲ指テ云アリ郡ヲ指テ云アリ古事成務記ニ定賜大縣小縣之縣主ト見ヘ後ニ郡ト云ヘリ

○縣ノ宮ハ禁裡ノ西ノ方ノ北ノ御門ノ邊ニアリ諸國外官ノ輩除目ノ行ハルヽノ時ハマツ此社ニ詣テ除位ヲ祈ル○物語ナトニアゲ〻見ル行ナトイヘルハ田舎ノ義ナリ萬葉集ニモ淡海縣ノ物語セントヨメリ○伊勢鈴鹿縣ノ神社式ニ見ユ倭名抄ニ英多アカタトヨメル是レ也古事記ニ倭建命御子

真名ニ書クトコロ多シト雖モ初學ノ人ノヒカメヨマンコレヲ恐レ今大概假名ニ直シテ書ク然ルニ又原本ノ意ヲ失ハンモ計リ難ケレハ其真名ヲハ本文ノ左ニ附ススヘテ此日記ノ古寫本多ク真名ヲ用ユタヽ定家卿本為家卿本烏丸資慶卿本專ラ假名ヲ用ユ且ツ本文ノ右ニツケタル真名ハ傍注ナリ

土佐日記

をとこもすなる日記といふものを女も〜てそなるなりそれかとも

〜の十二月乃(扶ナシ)せるあるものその日(詳ナシ)いぬの時(古門)ばかりにそのよ(扶)いさ〜らめり

「をとこもすなる日記トハソモ〜今ノ世ノ人ハ日記ト云ヘハ旅ノ日記ノヤウニ思フナレト総テ日記ト云モノハ日々事ヲ記セシヲ名ケシモノナレバ旅日記トノミ云ニアラズ中昔シ家々ノ記録ヲ日記ト云ヘリ依テ旅ノ日記ヲ譯(ワケ)テ云ハンハ路次記或ハ旅日記トコソ云ヘシ扨家々ノ記録ト云モノハ皆男(ヲノコ)ノ記(シル)ス業(ワザ)ニシテ然モ漢字ヲモテ記セリ素(ヒト)ヨリ女ノ業(ワザ)ナラザレバ男も故なる日記ト

建見兒王者伊勢別之祖ト見ヘ姓氏錄ニ縣主ハ日本武尊之後也ト見エ今岑ノ川崎ニ社アリテ縣大明神ト称セリ○姓ニモ云太平記ニ見エ

云モノヲ女モシテニントテ　トハコソワレルナリソレヲ今假名モテシルセルハメヽシキ業ナレバワザト女ノカケルサマニイヒナシテカキシモノナルベシ之レヲ是ノ日記ノ趣意ト云女ノカタヨリ云エヘニ男もとハカケルナリをとこもすなる云々アルヲ異本ニをとこのすなるトアリ評メ日ク此レヲ正シトス季吟ノ注ニ男文字ニスル日記ヲ女文字ニテカクトノ心ロナリト云説アレト僻言ナルヘシ云々トアルヲ考証ニ評シテ此説をこもすなるトアルもノ字ニ泥ミタル説也ト

職員令云國曰守郡曰大領家曰令和訓栞云くサカつかさトハ國司ノ美也後ハ音ヲモテヨヘリ國司ハ守ノ様目ニワタリテ云コトナルヲモテ日本記ニ國司守トモ書セリ司ハ官府ニ就テイヒ守ハ其人ニ就テ云ナリ國司ノ称久シク傳ハリタルハ伊勢ノミヽ北畠家應暦元年ヨリ天正四年マテ　百

云源氏梅枝ニ女手トアル注釈ニ宜長云ク女手トハ漢文ニムカヘテ歌物語ナドカケヲ云土佐日記ノ初メニ男もすト云日記ト云モノヲ女モシテ見ントテ云ヘル意バヘナリトアリ此日記ト云コトハ紀氏以前ニ筆日記ト云アリ河海抄其後平仲日記ト云アリ仁和寺書目録コレ等皆日記ト云それのとゝトハ錦織翁云クそれのとゝとハさゞらみもさゝでもざとおぼめらゝていふことだのミなりトアリ其實ハ承平四年也ひとゝ日トハ真淵云クひと日といひてきこゆるを又日をとらさねて

北九年ニシテ壬セタリ國司ヲ國上下イヒシ事靈異記ニ見エ今國守ノヨミトス又國司ヲクニノミコトモチトヨメリ

和訓栞巻十八云くるよ〜日本記竟宴ノ歌ニ見エ解由ノ義也格ニ如有闕怠仍テ停　鮮白ト見ヘ明律ニモ官吏給由トモ見タリ

和訓栞巻十四玉館ヲヨメリ建ノ義ニヤ唐モ同クヨメリ儀式帳ニ見エ寺ノ字ナルヘシ館ノ字ハ盛衰記ニ見エ

いふハせ一日といひてその日のいぬの時といふ意也

ある人ぐ〜このぬかせあとゝ歩たゝ色いのことぐもこなたをへ〜解由などゝ書て書むたちよ

よ来いてゞ舟よのるなきホへたゝこれこれこれこれ

あるたゝ〜ばおゝそのたゝ年こゝろすゝ〜

つるゝ人ゝたゝんゝこのれゞゝ〜ゐひゝ〜ゞ日

あきのにとの〜〜つの〜あるうわよ歩ふ

けぬ

「ある人トハ前段ニそれのと〜ナドゝ云ヘルコトクワザト自ラヲオボメカシテ云ヒタルモノ也

「あゞ〜ハ上田ノ意也委クハ古事記傳ニアリ文廣博ナレバ今畧ス宣長云々諸國の司人の其任國をさ〜て縣といふも古へ京より國々の御料の縣み宮人などのゆきゝひ〜ころの名目ゆゑ〜之古今集のを〜ことだみ文屋康秀ゞ参河掾ゝなりてあゞ〜ゝハえいでゝ〜しやいひいひやれりける土佐日記ゝある人あゞ〜このよとせいつとせをて〜ゝなどあるも縣をゝ田舎をいふとのゝ心得きつるハ非なりト　四とせ五ゆゝとせ等

○和訓栞巻十八云神代巻ニ取捨ヲトモカクモトヨミ三代實録万葉ニ左右ヲとふらくふトヨメリ古今ニとすまハかゝるなくすれハあないひもふす源氏ゐとあれハかゝるゑとさまかくさはゐトハ外ノ義かくハ此の義ナルヘシ免角亀毛ノ意ニ云ハ傳會ナルヘシ今とかうトモ云ヘリ亀毛免角ノ字ハ空海ノ書ニ出ル今云亀毛免角ハ楞嚴経ニ出ル

○日本地誌提要巻六曰和泉ノ彊域東ハ河内紀伊南ハ紀伊北ハ摂津西ハ海ニ至ル東西凡ソ四里十四町南北凡六里東南山ニ憑リ西北海ヲ肩ヒ土地陿小ト雖モ甚膏腴五穀ニ宜ク魚塩ノ利アリ風俗柔和ニシテ葦奢ニ流ル但シ山居ノ尼淳厚ノ風

トハ紀氏延長八年ヲ以テ土佐國ニ下リ今承平四年ニ舟出スレハ乃チ前後五年ニシテ其任國ノ間ヲ已とも云とセト云ヘルナリコノ任限ノ事世ニ相違アリト雖モコノゴロハ四年ト定メタリ續日本記巻廿一ニ天平宝字二年冬十月ニ勅シテ頃年國司交替四年ヲ以テ限トセシカ自今以後ハ六歳ヲ以テ限リトストアリ日本紀畧ニハ孝仁六年七月諸國司ノ遷替四年ヲ限リトストアリ類聚三代格ノ巻五ニモ四年ヲ用ユト云菅家文章巻五ニ一秩四年忠節ヲ盡スト云百僚訓要抄ニ諸國ノ守を

ハ受領と申すり國司のみすり當時の守護人のごゝ〳〵當任ハ四年すりよき國司をハ重任とてろさねて四年をこぶ又延任とて任をのべらるゝもありトアリ續古今ノ離別ニ紀貫之美濃のをけるてまろりゝる時ゐられをしゝてよめる「一日ざゐ之ぬい惑しき君ぞいすたとし孔巳とセをいゝ〳〵すぐさんトアリ已上ノ文ヨリ考レバ任限大概四年也と知ルヘシ」たてゝハ任滿ヲ云「もいの事ども」トハ聞書云々前官ノ人後任ノ人ヘ國務ヲ渡ス時官税公事イロ〳〵ノコトヽモヲ皆ナシヲヘ

存セリ氣候極暑九十三度極寒三十九度郡四郡アリ大島和泉泉南日根也村数三百三十三町数七十里租税總八万七千八百三十五石四斗一升八合二夕人口二十一萬四千五百二十二人戸数五万千二百三十三戸也

○和訓栞巻十四云たひらハ平ヲヨメリ俗ニ掌ヲ手ノヒラトイヒ又物ノ平カナルヲ掌ノ如シトイヘリ童蒙頌韻ニ夷トヨメリ

ふふ乃日の池ゆゑ〳〵りゐゐ〳〵ゆゑたもふハ千世〳〵ゆハまつや

○うなのをなむけ

和訓栞巻四云新選字鏡ニ餞ヲヨメリ餞ハ食ニセリ贐ハ貨ニカヽル旅立人ヲ送ルトテ馬ノ鼻向ノ義也今畧シテハナムケトイヘリ拾遺集ニせんゝ音ゐてゝ詞書ニミヘタリ門出ヲ祝ヒテ途テレイコトヽモ皆シヲヘテヽト云タルモノ也解由トハ見聞抄ニトクルヨシトヨム乃チ算用結解ノ事也此ニテハ算勘滞リナシトノ証文ヲ後任ノ人ヨリ貫之受取ルナリ今俗間ニ手形ナド云類ノ如シトアリ三代實録巻廿八云元慶四年冬十月七日丁亥制負觀九年十一月格曰勘解由使起諸偁去承和九年八月二十三日下諸國符偁凡國司交替官符到後百二十日内府了歸京若違之停留灼然合解又雖交替訖未得解由選任之人不得居官無職之徒不許直寮令諸國所進不與前司解由之状依理不盡返却而或國寄事辨中経年不進或國僅雖進之理亦不盡因茲前司未免抑屈之愁後司漸終四年之秩文續日本紀巻十一云天平五年四月辛丑制諸國司等相代向京或替人未到以前上道或雖交替訖不付解由因茲去天平三年告知朝集使等已訖云々トアリ日本紀竟宴歌ニ阿弥波禮留安比古尓阿比天阿知支奈久四年之間解由無之紀朝臣安ハ太政官或延喜式政事要略等ニ出ツ眞淵云ク解由ハ國司年々の年貢などをうけとりとゝせる計帳を勘解田使ゐおくるゐ勘解由の判官主典勘

中悉ナカランタメニ道祖神ニタムケズルナリ

定して目録をつくりて勘解由の長官次官に申せハ長官次官直又奏問せ〜むるなりとゝやこの勘解由使の解由状をとりてと云るなるべしトアリ

たちトハ和名抄居處部云館唐韻云館官反作館和名多知釋日本紀巻十三云高槻館私記曰案假名日本紀作高槻斐乃多知

よくぐ〜つる人々等トハ見聞抄云よくぐしつる人々とハ云るまゝおくりをする中にとしごろ具し使さるハまゐれぐさ〜てをやくのゝぶぬさまなりトアリ

今ハ妙壽院本群書類從ニ拠テ其字ヲ補フ

とこのゝハとともかくもなり

夜ふけぬい夜ノ更ルナリ

廿二日和泉の國までたひらふみなをゆ川藤原言実トキザネ卿なれど馬乃餞もなしたゝ

上のゝ中なゝ下しもなゝ群ゝ醉遊安海ひまをゝいあゝまゆ〜くを

ふゝ〜ゝ社ふ〜めみてあくれ海ヲカヘ

和泉ノ國ハ畿内ニ在リたひ〜〜らふと云々ヲ原本ニとさひ〜〜らふトアリ今ハ為家卿本附注本ニ拠テ之ヲ改ムソモ〜和泉ノ國ハ都モ近クシカモ土佐ヨリノ入リ口チレハソレマテ海路タヒラカ

○新撰姓氏録巻七云山公内臣同祖味内宿禰之後也同十云山公重仁天皇皇子五十日足彦別命之後也同十八云山直天御影命十一世孫山代根子ノ後也同二十云山直天穂日命十七世孫日古曽日乃名命之後也同三十云山首火明十一世孫尾張屋主都久命之後也

○万集集十六云楷能来酒屋尓真奴良留奴和之佐須地立率而來奈麻之乎真奴良留奴和之同十九長歌云荒風浪尓安波世受平久率而可敝理麻世毛等能国家尓

○釋日本記巻十六云土俗古點クニビト爲避後嵯峨院御諱可讀ヒト也

○諱ヲ避ルコトハ顔ニ家訓風操篇容齊隨筆除叢考等ニ出ツ

○和訓栞巻三云い

ニト願ヒヲ立ルナリ案スルニタヒラカハ平穏ノ義ナルベシ「祢ぎのひい心ニ誓ヒヲ云」藤原言實ハ定家本為家本ナドニハ藤原ときざねト假字ニテ書ク其父祖審ナラズ案ズルニ土佐ノ國人ナランヲ「うまのもなむけトハ新撰字鏡ニ餞ト云即チ馬乃波奈牟介ナリ古今離別端詞ニ云クさごときのミこの家みて藤原のきよふるあふミのすけみまうりける時みうまのもなむけしける云々トアリ真淵云クうまのもなむけハもの〻ゆくをうれみうまのもなむけをうなゝこむけ

てつゝがもなくてよなといふをもとみて後よハをのうまのもなむけの料み酒のませなゝとするをいへりきて馬ハ倭みあるゆへにこゝハ舟路なれとハこハふれいへるなり「ろひすきてトハ醉過ルナリ乃チ酩酊ノ義也「ろ」ハうゝのふとりにてあざれあへりトアルハ巻首ニ云ヒシ如ク例ノコトヲウラウヘニイヘルナリ原本あざれあへるトアルヲ今ハ妙壽院本為家卿本扶桑拾葉本群書類從本等ニ依テ之ヲ改ム「あざれトハ字鏡集ニ鰺ヲアザル

みな諱ヲヨメリ忌名ノ義也生ルニ名トイヒ死ルニ諱ト云續日本記ニ先帝ノ御名及朕之諱ト見ヘタリ崩後ニ御名ト称スルハ異邦ノ史ニモアレトモ在位ニ諱ト云ハ心得カタシ西土ニモ之レヲ犯セシモノ多シヨテ張世南カ游官紀聞ニ委ク辨セリ二條家ニ世ニ將軍家ノ諱ノ字ヲ受用ヒサセラルヽ

トアリ和名抄鱗介部云鮧野王按鮧和語云阿佐留魚肉爛也源氏花宴云とな人ハうへのきぬなるみあざれこるおかきこすぐこのなまめきこるかて云々トアリ真淵云あざれのざれい洒落の音なりあいあまくるを畧〳〵ていふろ源氏ゐあざれなるおかきこすぐこなどいふすて思ヘトアリ春海翁云クあされハ肉のあきれとるなといふと同〳〵ことだみて人のうへよいふハこざれとるさまをいふなるへ〳〵こゝゐ去かうこのかとりとことさ〳〵みろけるハ塩のあるうこ

ハ鹿苑院ノ時ノ二條滿基公ヨリ始レリ

○わむハ神代巻ニ褒美ヲヨメリ秀ブハゴラカシタル詞ナリ譽モ同シほめるトモ云めるノ反むナリ讃モ同シ

○源氏をとめ云大將さゝづきさしたまへハいゝうるひしれてをるゝかつきいとヤセ〳〵なり云々トアリ竹取物語云あれもたゝゝりべみて人ハあざれ切へりとたハふれうけるなりそい魚の肉ハ塩をくいふまいあざれぬものなれバ之トアリ

廿三日山の麋鹿ヤマノシカとゆふ人あるこゝ人國ゐあるゝ〳〵しゝもいひつゝふものゝあゝぶちこゝそたぶしき扶群ゆうみて馬のたゝるむけ〳〵新守ゐゝみやあゝん國人のゐゝつゝとゝて今をとゝえざなるをいゝるものゝまぢぎむきけるこれいものゝゝりて云むるみ〳〵もあゝび山の康数トアル山ト云氏ハ姓氏録ニ山公山直山首

ハてこゝちゝゝぶきゐゐあれて云々トアリ

左傳成公十八年云周子有兄而無慧不能辨菽麥杜預注云不慧蓋世所謂白痴也和訓栞巻十一云源氏ゐあれもの〳〵物語せんと云へ枕草紙ゐ犬をきしてかくいへるゐ見へたり東鑑ゐ白物とかけり

等アリ此山トアル氏荷レ末葉ナルカ審ナラズ定家卿本為家卿本ニハ木トアリ是レモ同ク姓氏録ニ在リいひつゝふものこもあゝず等トアルヲ為家卿本附注本等ニハいてつかいるひとゐもわゝさりきトアリ考証ニ之レヲ評シテ良トスいてハゐての假字ノタカヘルニテ率てゆ〳〵ナト云ゐてト同シ語ハ也かゝゝゐゐ等トハ考証ニ紀氏自ラ謙退ノ言ハトスもちずきなんきゝゐトアルハ異本ニもぢてきなんきゝゐトアリ之レヲ正シトス國人の心の等トアルヲ季吟ノ説ニ國人ハくゐゝとよむ

千鳥縦横ニ飛行ス依テ千鳥足ノ語出ル乎

○あそぶハ和訓栞巻二ニ遊ノ字ヲヨミ日本記ニ消遥ヲモヨメリ万葉ニハそびなくもとト云アリ

○ぬみハ文書ヲ云日本記ニ経典ヲヨメリ経見ノ義ナルベシ通茂公ノ哥ゐうつし置ふてゐ何ゝハます鏡手ゐとりて見ぬ古へとなゝ

ぐし後嵯峨院の御諱を國仁と申せしより儒書ゐてもゝゐゝとよみ待りとアリ真淵云々御諱をさゝるゐハ今上と太上天皇との二代のみなり続記ゐゝ代々の御諱をさゝるゐあゝも又他の國のさゝめすハ始祖と五世の先の諱までをさけてその外ハさけざるゑそのさゞめすゝ皇朝ゐもハ用ひられしゐなし「これハものよりてゐむる等トハ此時オクリモノヽヨキニヨリテ其人ヲ嘆美ルニアラズ金ノ厚情ヲ嘆美ルノ意ナリ

廿四日 新河梅所 講師うゝゐ法をなむけゝにいでませりあるとと

一説ニ文ノ音轉也ト云ヘリ枕草紙源氏ナトニふみト云ヘルハ詩ヲサシテ云河海ニ文ヨリ始テ草本ノ枝ニモノヲツクルハ皆其色ニツクル事也ト見エ書ノ首文ノ忌ナ共ニ王仁ノ後也姓氏禄ニ見エ

○伊勢物語云左中辨藤原まさちかといふをなんまらうどぎねふてその日えあるじまうけしけるあるじ酔ひしれて一ふみ字そぐよしなぬものしぐ所ものなるふとそぐ

あそぶ

講師ト八政事要略ニ云ク延暦十四年八月十三日符依右大臣宣奉勅如聞諸國師任限六年兼預他事煩以解由自今以後宜改國師曰講師毎國置一人眞淵云いまハ國〻ハ國分寺ありて其住職を講師といひて其國の僧尼ハ司なれ共ハ土佐の國分寺の講師之別ひきれてトハ酔テイウカヒナクナリテト云意ナリシレモノナド云シレト同シ

こりけること云々

○大和物語云大將ものりづけ忠岑もろ〻〻こまハりなど〻けり云々

○和訓栞巻六上云かつけものトハ琵琶行ニ纏頭ヲヨメリ被物ノ義也下學集ニ纏頭ハ遊伎之賄賂也トミヘタリ永久ノ太政官符ニ上下諸人不可纏頭事トヘタルハ頭ヲ包ムヲ云ナルヘシ

聞書ニハ杜預カ左傳ノ注ヲ引テ白痴ノ字ナルベシト云

万葉九長歌云世間之愚人之吾妹兒尓告而語久云々トアリ本朝文辨云源順歌云不足言不足嘲共恥白物之入清雲ものしぐれし文字ハらの誤り眞淵ハものゝろとシテ註ヲ下ス然ルニ諸本皆もノしろトアルヲ以テ今ソノマヽニ改メス考証ニハくふしまれをふしこそナトアルし文字ト同シクシテ助字ナラン故然ルニ助字ノし文字ノ下ニハ必スもと受ルヨウニ云説アレトサニモアラザルベシ其例ハ字津保國讓ノ中ニさゞバましていうまれしゞくめ

○古今序云そも〳〵哥のさまむつなり
かゝのうゝこゝろもゝくそあるべきトアリ
○和訓栞巻二云フあるしハ主ヲヨメリ又主人ヲヨム神代巻ニミユヒぬ反ルヘ家ニアル又シヲ美也万葉ニあみじト見エ物語ニ響ヲあるじト云モ意通ヘリ伊勢物語ニあるじまふけナト云ヘリ又諸社ノ祭ニ飯する者ヨト云ヲ上卿ノ詞ニみあるじつかふまつるトト云モ同シ世説ニ設主人ト見ヘタリ
○和訓栞巻九云朝野群載齊王ノ処ニ輦輿一基腰輿一基トアリ又四方輿手輿張輿腰輿アリ靈異記ニ輦ヲ云瑶輿ハ親王家晴ノ時メス白輿ハ親王家摂家清華大臣以上ニ用エ綱代輿ハ常ニ用ヒラレ又長柄ノ

ようれ〳〵さふ〳〵ハまゐしく侍らん又十訓抄ノ下ニ猶しあなづらハしくゝろぐしくおぼゆ等トアリト云評シテ曰ク此説拠ルヘシ「ゑ字をとゝ〳〵ゑ等トハ是レハ例ノ戯ムレカケテ醉ジレテ足モトノシドロナルヲ云世間ニ酒ニ扁ヶ醉テ手鳥足ニナリシト云ト同ジ「あそぶハ遊ヲ也タハムル意ヲ含ム

世ゑ日守たち館よりまゐよびまふ丈ともてきこ聞ま来よだれこいこゆて日ひと日夜こゝろを附ゝあそぶやうゐゝ昨ヨ今ノ

上ノ十八

守のこゝちトハ今度新任ノ土佐守ノ館ヲサスソノ館ヨリ紀氏ヲヨビニオコセシナリ「文もてきたれりトハ今云手紙ヲ使ヒニモタセ来ルヲ云日ひと日夜ひと夜ハ一日一夜ヲ云

せ云ねなるか守の館あるじ饗等のあるじくのまゐめてきを郎等のこなのまとゝ為問ものゝ者ものゝ来ものゝ詩うこゝろ附あげていひくあやまゐゝ誤あるゝじもまらうゝどもこと人客いひあへゝ笑ナシかゝうゝえこれまそらゝ越安部やまゐと云あるゝじ社守のよ絶来ける

都いでゝ居るあいんとこゝものをこゝうひもれゝ

輿アリ又板輿アリ通鑑ニ見ユ鈎ゴシアリ又半切トモ称スモト官家ノ召シツカハル丶婦女ノ乗物也今公大臣モ是ニメスナリ塗輿ハ四方輿ノ代リ也當時ハ車ノ代リトス武士并僧ノ輿ニハ廂ナシコザ包ヲ荷輿トス地下ニ用ユ和名抄ニ舟具ノ櫓ヲコシトヨミ層ヲ搭ノコシトヲメリ越ノ義ニヤ

わかれぬるかなとなんありければかへる前の守の
よめりける（よめる前群）
しろたへの浪路をとほくゆきかひて
われにゝべきはたれならなくにこと人々のもありけれど
さかしきもなかるべしとかくいひて前の守も（群ナシ）
今のももろともにおりて今のあるじも前のも（さきのもいまのも 為附）
手とりかはして酔ひごとにこゝろよげなることにて
いでいりにけり（いりま群 さりまイ）

「なほ守の舘にて」トハ今日モマタ〳〵作日ノ如ク今ノ土佐守ノ舘ニアルヲ云也「あるじ等」トハ饗應ス

○シロタヘハ和訓巻十一常ニ白妙ト書リヨテ文字ニ就テ白ク妙ナルト説ハ謬レリ白トハ湅ヌヲ云妙ハ假借ノ美モト絹布ノ名也ヨテ万葉ニ白ノ細布ヲ訓セリ白栲ノ袖白木綿ノ吾衣袖トモ云白妙ノ雲庭白妙ニ白妙ぬはふナド万葉ヨリタベ真白ナル意ニ轉シテモ云ヘリ○かくハ和訓栞巻

ルヲ云「あるじ」ハ神代巻ニ設ニ饌百机一以盡主人之禮一トアリ「をのこまでにものかづけ等」トハ自ラハ勿論従者マデモト云意ヲ含ム「かづけ」トハ季吟ハ纏頭をかづけものと琵琶行によめりきぬなどかづけあたふるをなりト云真淵云かづけるハ衣裳をもらへハかならずうちかづきて礼をする故に人にとらするをもかづけ物といへりトアリ「からうた」ハ詩ヲ云「やまとうた」ハ歌ヲ云今カク云ハカラウタニ對シタレバナリ「あるじ」ハ新任ノ土佐守ヲ云「まらうど」ハ紀氏自ラヲサシタル之季吟

六云左傳若而人ハ而ハ爾ニ通スルヲモテヨメル也ト云ヘリ如之ヲヨムハ少異リ又如許ヲヨメリ恁ヲヨムハ俗語也恁地恁麽等ノ語アリ

云あるしをさきにいひてまらうどを次まうけるハ紀氏の白紀なれバあや又當官にたつとふ心ぢへあヤ侍〳〵へトアリ「都」ゾでゝノ歌い新任ノ土佐ノ守ノヨメルナリ此意ハ都を立出テ君ニアハント思ヒハルぐ土佐ニ来リシ甲斐モナク今速ニ別ルヽトハ浅念ノコトナルヲ云「こゝ」トハ和訓栞ニ輿ヲ訓ス運ヒ越ノ義日本紀ノ歌ニたこゝゆこさハト見ヘシモ手シテ石ヲ運ヒ遣ル意也「ちろたへ等トハ紀氏ノ自テヨメル歌也ちきかいハ萬葉ニ往反ヲヨメリ此意今眼前ニアル遠キ海路

こしハ来リ越スゝ注ニ輿トハシタルハ参考ニ供スルマテゝ取舍ハ看者ノ見ニマカス

綰抑ハ漢土ニ於テ別ルヽ時ノ儀式ニヤ○故事アリ詩淵源ニ出ツ

ヲユキカヘリテ難義苦勞スル人ハ外ニアラシト思ヒシニ又我ニ似テ君ニモ難義ノ波路ヲヘテオハスト云コト也 ちろ〳〵への浪トツヽキタル歌ハ万葉ニナシ古今春上云ところ海のおぎしにさせるちろたへの浪こそ立くるあをぢしま山よ入〳〵ず 新勅撰春上云ちろたへのなゝぎとけてヤ春ハくるこの花ふくまゝ〳〵ぬ花もさきナリ

みべきハ似ル也 きろしハ古事記ニ佐加志賣トモ又賢ヲさろしト訓シテアレド今其歌ノヨキヲホメタル義ナルベシ かくハ神代巻ニ如此トモ又如

○日本地誌提要巻六十四云浦戸ハ吾川郡ニ禹ス灣回北方ニ入リ長岡郡吸江村ニ至リ土佐郡鏡川布師田川ノ下流ヲ受（高知ノ舟津タリ北東西二十町南北二町深四仞許港口濶二町東ニ向フ）○ときいづノこきハごくト同シ和訓菜巻九云こぐハ舟ヲコグナド漕ヲヨメリ万葉ニ多ク榜ノ字ニテヨメリ字彙ニ榜ハ進舟也ト云又水手ヲヨメ

是トモ云もろともなどハ真淵云クこの館を出るみあるも階よりおりておくるさまなりトアリてをとりかけすハ詩送別ノ時握手把手綰和惜別ノ意ナルベシ　ろひこゝ等トハ真淵云ろひこと八醉言なりこのぶでのことをおきしなどいひのそたをいふなるべしいでみナリハ館ヲ出ルナリ

廿七日大津ヨ梨浦戸をさしてこぎいづ（もる宝）のくあるうちよ京ふゝろまれるわゝ女子こゝふ（くゝて空附くゝて扶）て傷ようをふゝこのぞこのころ出立ぬいでゝちいそぶをりん

ルハ美訓也源氏ニこきまひてトアルハ漕廻ル美也和名抄郷名ニ漕代ヲこいしろトヨメリ古ヘカヽル品モ有シナルベシ

○古ノ十五云もろこしも梦ふ凡しろぐゝト云同十八云我を君なゐたのうふふありしろハ後九云秋の田のいねてふおとをクけしわを新十六云さよ更しろむ月もいりにきれどなるごともいとゝ（えいえんれも仁いをゝ宝群）ぶこゝのうるゝ女子ゝなきのゝぐゝのなゝこふるあるふ人ともえゐ人（廻）ぶこのあひゞこしたる人のてふをいぶせるうゝ

宇治拾遺第十二（ふ馬　ち妙）ふもこのゝ形ゝなりをこのゝゝぬ人ゝあもしだなわそ和尚

大津ハ和名抄第九二土佐國長岡郡大角津（於保）上アリ浦戸ハ真淵云ク浦戸ハ大海ト入海トをへだてゝさゝ出たる所ナリ大津より南へ二里ばかりゝ古府より三里餘なり今の府よりも三里ばかりゝそこをさゝてとまづいひてさて大津ずりそのつゞ

きの廬子の崎はるゝありいでたちいそぎハ旅ごちの設なりいそきをゐれどくいふハ女のさまゝ
のゝそとゝふハうゝるまろうびの中にこのるゝ
はこのなるゝゝあるをいゝあなりトアリ日本地
誌畧巻三曰ク浦戸ハ泊舟ニ便ナリト云こぎい
つハ漕出ルナリこゝまゝてハ定家卿本扶桑拾
葉本附注本等ニくまくしてトアリ見聞抄ニ
ハこてみゝてハこの國みてうせゝるまて京
へのぶりぎえのるゝみいなうるへしとアリ今
云くこゝまゝて俄まうせゝまゝとアルハ土佐國

○をゝゝハ和訓栞
巻五ニ可咲ノ事ヲ
云ヨトテ真名伊勢
物語ニ此字ヲヨメ
リ東鑑ニ事咲ヲコ
トヲカシトヨメリ
新撰字鏡ニハ可咲
ヲアナヲカシトヨ
ミ見醜貝ト注セリ
日本靈異記ニ幸ヲ
ちゝくゝゝトヨメ
ルハ美訓ナルニヤ
神代記ノ俳優文民
ヲ兼倶抄ニいゝゝゝ
も比與ゝやつしを
ゝゝなゝゝやうゝ

ニテウセタルナリ しゝバトハ詞ノ玉緒巻二云ク
此ハいとゝある過去の去なりきて去ゝとつゝ
けるハこその結びのゝゝと一つなり いでゝこち
いそきハ旅立ノ用意ヲ云大和物語ニ九月つご
もりゝなりいそぎゝてゝトアリ このなしゝハ悲
嘆ノ義也 あゝ人ゝもえゝゝず等トハ父母ゝゝ
ナラズ外ノ人マデモ悲嘆ゝタヘサルヲ云 ゝヤゝ
へゝ思ふ歌ハ前ニ京ヘカヘルニ女子ノナキノゝゝ
カナシミコフルトアルヲ受ケタルモ也此ノ意今
都ヘ帰ル出立ナレバモノゝ嬉シカルヘキニカナシ

成て仕入ゝミトイ
へり古へハ名目ニ
モイヘルナルヘシ
加し反きナレハき
き〻月しめゞ面白
キヲ云ハ未ニテ轉
シテ人ヲアザケリ
笑フ、ートニモナレ
リ

クアルノハ帰ラヌ人ノアルユヘソト云コト也此
歌ヲ宇治拾遺ニ紀氏トセリ此日記ニハある人の
歌トそト宇治拾遺ノ誤リニアラズ何トナレハ昔
記ノ初メニモある人なり〻ゆ四とせあとせトモ
アレハ茲モ紀氏自ラノ事ヲある人ニナシテカヽツ
ルナリ考証ニのる人のハある人みトアリシヲ誤
ルトアレド此説餘レ面白カラズ宇治拾遺第
十二云いまハむかし〻貫之ガ土佐守になりて
くだりて有けるほどゆ任えて〻のとし〻七八
だゝりの子ゆえもいまずをこゝげなるをこの

きりなくうなしう為けるゞとこのくまづゝ
ひてうせゆゝれバなきまどひやまづくだろ
り思ひこゞろゝゞゆ月ごろゆなりぬれ
ハこのくてあるへきことゝろハのゞりなんと思ふ
ゆちごのこゝまてなるゆとありしをやなどあ
もひ出ゝれていゝじうるなしゝり〻れハえし
ゞゆゝろきつけゝゝまゝやこへと思ふもゆのゝこのな
しきハこのゝぬ人のあれハなりけり真淵云宇治
拾遺ゆつゝちきれゝことせるハ後ゆまきゝつゝ
へてゝきしをゝふん今ハこゞつゝゝの哥とせすまゝす

○ちごハ乳兒ノ美也和名抄ニ赤子ヲヨメリ信州ニテアルト云

○撫ハカキミタス也撫ルハ手ヲモテザクルナリいつごハ何処ナリ

べてこづゝのをも人のさゐまようけるもおかけれバいづれてもありなんトアリ

まゝあるふとき

なるものとヨモれつゝなるおるき人をいづくとこふぞ

このかしこうわるとゆひるあひごゑ麻児乃崎とふ

あをかき守のきゝゝまゝこと人これゑも酒なぞ

もておひきゝ筵ヨ狩のさゑひてヨウれゝるきき為れゝゝこをいふ

守のうち社人この中よこのゝる群人ぞんあるゆう

みわいそれゝのめくゝまゝれがゝいひてゝ社人を

のゝちあゝもゝ先ゝもちゝこのうゝべふゝく

○古四云物ゝゑ秋そかなゝ紀もみちつゝ同云をみなへしうしとき尼つゝそ行過る同五云花尼つゝそ人まつゝきハ同七云春日野ゑわゝなつゝつゝ同十一云あゝふおとはゑゑたゝるゝゑなる神の音ゑきゝつゝ恋渡る

かれ

いそハ和訓栞巻二云磯ノ字ヲヨメリイシノ轉ナリヨテ磯をしドモヨミ神

みゆゝひいぐせるゝこ

をゝと思ふ人やとまるゝあ葦鴨ものうちむまし

てこそまれハ水ゑれをいひそひ桑れバいとゝ

くめでゝゆゝ人のゝまゝわゝる

さゝをゝせどそゝをひゝゝれ為ぬゝでつゝ社ゝゝるゝ

ゝをゝ若ゝゝるゝゝんゝ

あ八第ゝ者ゝゝで出のれつゝ海をゝゝひつれバ為附ナジ

いなんゝゝ者ゝゝるゝゝ風も吹きゝゑべゝゝゝさゝ

げゞ舟ゑのりなんゝゝ

あるゝとき八或時ナリ　あるゝもの言トハ眞淵云クこ

名式ニハ岨モヨメリ字書ニ磧ハ水中ノ磧也ト見ヘタリ式ハ磧ヲヨメリ字書ニ磧ハ石ノ貌トイレト本邦ニテ磧ト一ニ用ヒ來レリ新撰字鏡ニ湄又漬モヨメリ

あみハ和訓栞巻二網ハ荒目ノ毛ナルヘシ塘網ハ引アミナリ撒網ハ打アミ之又扇網アリ又擲網アリ伊勢ニ小ダカト称ス

の哥万葉四ニ夢之相者苦有家里覺而搔探友手ニ毛不所觸者とあるに似たる意なりいつくハいづこに

をるぞといふごとく聞書云この哥のこころハなき人をなくなりたりといふことをきくにもすけまに

のあまりまうちとすれてともすれいづくなるぞ

とそひなとするこゝろあるおもむきなり有無

をきくにすすけまにづこゝろるすそう

をもあハれなり　つゝとハ詞の玉緒巻六云ク抑てハ

廣くつゝハ狹きもあハ一ツの例をもていそぐ音に聞て

戀ゝくゝろといふを先ツ音に聞て後に戀渡るにも

万葉十一云葦鴨之多集池水雖溢儲溝ノ方尓吾將越八方古今戀一云

あゝくもものさゝらく

入江のちくなみは

ちくずや人をうくこ

いんとハ　讀人しらず

○葦鴨ハ葦鶴ノ類

平葦鶴ノ丁ハサキ

ニアル忍わたセハ

松のうれこゝにあす

む哥　注ニ和名抄

ヲ引キテ云々ス

いひ又音にきくゝと戀ゝくゝるゝ同時に相交るにもい

ふこゝ然るゝと音にきくつゝ戀ゝくゝるゝとハ音にきくゝ戀

渡るも同時に相交るをのゝいふ辞にて先ツ音に聞て

後に戀渡るにハいひたしすへてつゝハ些意にてもを

ゝつゝかゝるゝとも相まし〳〵てするゝをゝいふ此故に上にいふ

るゝと下にいふるゝとたゝひに同時に相まじハる時にそ

の中間にをゝく辞ハゝてハつゝたゝにゝ共つゝハてに通ハし

かゝる所ありとゝるゝべし　鹿児の崎ハ真淵云ク鹿

子崎ハ大津とすゝびて有鹿子水門とハゝとなり　附

注ニ應神記の鹿子水門トスルハ誤リ也　守のそゝろ

ふハ新任ノ土佐守ノ兄弟ヲ云也　儀トハ孟子ノ注ニ石激水トアリ　心あるようなる等トハ真淵云心あるやうなるとハ哥よむ心あるをいふへしゐのめくハそのけしきなどをいふてゐこゝろなるえいゝ春海翁云哥よむにあるをいふなハあゝぞ心さしあるやうにいひなすなり　くちあみトハ真淵云くちあミハ口網なて今の俗語に口おとしといふごとく口なあミをえりたりといふ名なりもろもちなてさうひなたすけあふてやうゝしてなゝ出しとるなり諸持とふなうなひ出せるをいゝり宣長云々金原清方がいたく今世ハ海人のなりぎ

なる引網といふ有てそれなる口網奥網といふ右その口網ハひろさ六七尺斗長さハ五六丈もあるを海中へなゝおきて魚をとるそれを引あくる時ハ海人どもこゝらなゝくちてなちひいぶすなこれなんといへりさもあるべし哥よむこと〻口重きをたいふれなかの口網のおもゝてこゝらの人のろうゝてなちひいぶすひたとゝいひうりんといへう云々此説玉勝間ニ出さう今云クコレハ例ノタハムレカケタルニテ人々ノ口カロ〻トクモニアヒイデスロナモムキヲ口網ノ重キニタトヘテ云ヒシモノナリそろもちトハモロトモニモチアフト云コト也　さゝと思ふ等トハ真淵云哥ハワかれと

古今恋四

素性法師

そこひなきふちやハさはるぐ山川のあさきせをふかこそあぐこるくハこて

後撰春下

三條右大臣

ゆきうりなき名ゆゑふる花なれバそこゐも
ちれぬるのふりさう

紫式部日記云ちい
さきこうろを作帖
のうちなるけこれバ
くまもなきまいとゞ
しきにいろあひの
そこひもあゝぞき

惜と思ふとゝふコ鴛をそへて鴛といふすゝ芦鴨とい
ひてうちむれてとゝふべき料なり春海翁云クこの歌
ハ惜ヨ鴛をゝひよせうるヨハわゝすトイヘリ むれハスヘ
テ鴨ノタグヒ群ト云飛モノナレハナリ ゆゝ人のトハ原本行
人のト文字ニカキテたびうとト訓ス今ハ諸本ニゆゝ人と
アルニ従フ さをきせ等トハ紀氏自コフノ哥也 そこひも
ゝれぬトハ果テカキリナキト云ハンカ如シ此哥ハ君ガ深
キ心ヲ今コソ見タレトイハントテ上ノ句ハ序ニオケルナリ依テ
此哥ハ序歌トモイハルヘシ真淵云クそこひハえてかきり
とゝふかどの詞なり水のそこのゝまりきゝすゝ万葉ヨ

ゝなるヨ云々
源氏玉鬘云人のゝゝ
ちハおくれこるもな
みそこひあるものを
とて云々」
うみハ和訓栞四海ヲ
云全水ノ美ニヤ又
産ノ美魚鰕珍怪ヲ
錯リ出スヨリ云ト
イヘリ万葉ニ池ヲ
海トモ海原トモヨ
メリ湖ヲ水海トモ
云カ如シ袖ノ海涙
ノ海霧ノ海硯ノ海
トハ喩ヘナリ
ヨこつゝハ日本紀

あめつちのそこひのうゝヨ又野のそき山のそきゝいへるも
こなをそうきりのヨヨいくり天地のそこひのうゝハ天地の
をそうきりのうゝなりそきいこひの約ハれハそきそこ
ひ同語 ヨこつゝトハ真淵云ク季吟説ヨこつゝハ海の
字をよりけとあるいと誤ヨこゝハ海を渡るとゝふヨよ
り則ヨこゝとゝひて海の名とせり山をこしてゆく國を越の國
と云こゝつハ天つそゝ國つ神なとのごゝく助辞なりみハ
もちの約ヨそ則海つ持ヨそ海をこゝもちこヨふ神なる
ヨ古事記ヨそえて明らかなりそを轉して只海のヨ
ヨもゝふこそハ海のヨえおのれゝトハ季吟云クおのれし

二海神ト云和名抄
和太豆美乃加美
古今六云
わたつみの加さしあさ
せるおきつ浪もて
ゆへあたぎしま山

といふしい助字也この詞伊勢物語よろきりなくとゐ
くもきゆるうれとよびあへるよ渡守ゑ舟よの色
日もくれぬといふよ似タリトアリ　ちかくちぬハ潮満
こ弦をとるまるある人ともろ〳〵よつけそこ〳〵の寄
どむ時よ　みつのうしきといふ又ある人よ〳〵ごるなれど
のひうこなしといふのうこふよふなやうこ社塵ちめも
ちをそ〳〵ゆくあこもをでよひぬとぞいふなることい
浦戸よちまるる孫原の言実橘の季衡ちと人〳〵
おひき〳〵わお
をとるふし等トハ考証云クそのをりに似合しき餞別

の時よのなひたる古詩なをうるひ〳〵なるへ〳〵このひ
哥トハ甲斐歌也古今六云ク甲斐哥ひびぬをさやよ
もえしうるふれなくよこをりふをるさやの中山
このひうぬを祢こ〳〵山ご〳〵ふくうぜを人よもうもや
こゝづけやゝん季吟云クこの甲斐哥のそどめれ
哥ハこのうぢとりのいなんすをいそくをうく別を
〳〵きをりよ心もなるといをんうめうやのちの哥ハ
其おこりきこうる人こもを都の人なれハ京ゑ思ふ人
なきよもあ〳〵ぬをりふ〳〵梶とりの風もふき
ぬべ〳〵といひさゑけハ具ぜを人よもゞなこと

○蜻蛉日記云さゝき
ぐちたりし八舟ゑ
こもやりこを引て
まうけこりと云々

○甲斐ノ哥ハ古今ノ
遠鏡ニ鮮シテ云々ス

づていひやゝんといふことろよゝこゝるけるへし甲
斐ハ東國なれハ西國なれどゝうけりトアリこのゝゝう
ゝふよふけやゝゝ等トハ此時浦風ノ吹キテ塵ナトノ立シ
ヲ哥ニコトヨセテ或ハ人ノ云ヒシナルヘシ和名
抄ニ舟上ノ屋トアリちりもちりトハ漢土ノ虞公カ
故事ヲ云藝文類聚巻四十二引劉向別録云有虞
人歌賦漢興以来善雅歌者魯人虞公発聲哀蓋動
梁塵トアリそゝふゆくもゝゝよひぬトハ是レ又漢
土ノ列子ニ出タル秦青カ故事ニ拠ル列子湯問篇
六薛譚學謳於秦青未窮青之技自謂盡之

○そゝふハ和訓栞巻十三ニ神代巻ニ虚空ノ字ヲヨメリ万葉ニモヨメリ自然ノ辞ナルヘシ梵語雑名ニ天ヲ翻シテ素羅ト云トモゝヘタリ神代ノ巻ニ虚中トイヘルハ未有方所也ト紀セリ

○くゝゐ和訓栞巻八云雲ハ隠ルノ義也雲ハ石ヨリ生ストヨテ雲根ノ名アリ神代紀ニ雲氣モヨ

遂辞帰秦青弗止餞於郊衢撫節悲歌聲振林木響遏行雲薛譚乃謝求反終身不敢言帰トアリたゝよひぬゝぬノ字ハユハユル畢ぬナリとゝぞいふなるその結と辞ハヲオキナカラ猶下ヘツヽキタル歌ハ後十二在リ曰くいひひゝてハなぐさもやとそ思ひゝゝなぐゝりもこそ忘しかゝと見ゝそノ結び辞ヲ轉シテ下ヘツヽケタル哥ハ玉葉二ノ小式部ノ哥ニ曰ク雪ゝゝゝぞよそはゝんつをとゝさゝふ花をりてハ似たる哥なりゝゝもこゝろひハ今宵ナリ藤原言實ハ上ノ廿二日ノ条ニ出テタル人也 橘李衡是レ

ノリくもたりかく
るハ雲下掛ノ義也
雲のまかき雲のと
ざし雲のあがふみ
を雲のうき波雲のた
袖雲のあしナトハ
皆ミタテタル詞ナ
リ光榮卿雲ノ題ニ
心なき雲くも月す
ゑ月を祢〻みむゐ
かくろふ雲のたち
居ハ

○日本地誌提要云
湊浦ハ土佐國幡多
郡ニ在リ東西十五
町南北六町深十仞

モ土佐ノ國入ナルヘシ其父祖審ナラス　おひきゝ梨
ハ追蹤シテ来ルヲ云ナルヘシ
北八日こゝ〻戸なるこゞ出て大こなるをおゝふさ社（その附）
あひだゑまやくの守乃子山口の千岑沼（はの守群）すきるの
どもをてゝゝゝゝみゑいまこゝろゆゝ〻のこゝふ
大湊トハ考証ニ云前後のつきもて考ふるゑいまこ
土佐の国の中なるゑきふけ〻トアリ案スルニ大湊
ハ今湊浦ノコトナルヲ此事ハ土佐人ニ問テ改ムヘシ　大
こゝゝをもおふ等トハ聞書ニ風ゑ舟をおハするこ舟
ノ縁語ナルハ切りトアリ抄ニおふとハ追こゝろぬて

許西ニ向フ
万葉六長歌
恐乃坂尓幣奉吾者
叙追遠忘土佐道矣

ゐくこゝろトアリ評シテ百ク此説誤ル真淵云ク萬
葉ゑ吾者叙追とあるも舟路のるをいるゑてこて
ゑおふとゝふもおなどトアリをやくの守のゑ等トハ
紀氏ヨリ以前ノ土佐守の子ナルヘシ真淵云クをやうのろ
こもゑハ貫之より前の守の子千峯といふ人國のさる
へき女乃をゝなとゑゝまれてとぐまりゑくこるなる
へしトアリ　山口千岑事其父祖審ナラス山口ト云姓字
ハ新撰姓氏録巻九云山口朝臣道守朝臣同祖武内宿
祢之後也同巻廿云山口宿祢坂上大宿祢四世孫都黄直
之後也　舟ゑいゑたりハ舩中ニ積入ルヽヲ云

和訓栞巻十八云屠蘓ハ元日献ル酒ノ名ニ内〻行事ニ二袋紅ノ切レニテ五寸ホトニ鱗形ニシテ柳ノ枝ニ糸ニテツクル白散ハ刻ナカラ御銚子ニ入ト云又太神宮式儀式帳ニハ白散ノミニテ屠蘓ヲイハス内宮年中行事ニハ屠蘓ヲアハセイヘリ今ニ宮ノ白散ハ米粉ヲ用ルトモ云也是古ノ椒酒ノ遺意也

廿九日大湊ニとまれりくすし(醫師)ふりはへて屠蘇
白散酒くはへてもてきたりこゝろざしあるに似たり
とまれりハとゞまれりノ畧語也泊ル義ヲ含ム此
一段落を見ルニ廿九日ハ則チ十二月ノツモゴリナレバ醫師ノ
屠蘇白散ナトモテキタレル也日本長暦ヲモテ考フレハ
今年ハ承平四年ナレハ十二月小ノ月ナリ　くすしハ醫
師ニシテ即チ土佐ノ醫師ナルヘシ昔シヨリ醫師ハ
講師讀師ノ如ク國毎ニ一人ツヽオカレシ由令義巻一云
凡國博士醫師國別ニ各一人其學生ハ大國ニ五十
人上國ニ四十人中國ニ卅人下國ニ廿人醫生ハ各減ニ五

建武年中行事ニハ神明白散ト見ヘタリ二献ノ時也三献度嶂散ヲ供ス御薬ノ儀式ハ三ケ日也ト見ユ屠蘓ハ延喜式ニ委シ唐ノ孫思邈ヨリ始リテ菴ノ名ヲモテ酒ニ名クトモ羽帳ノ名也トモイフメリ本字ハ屠蘓也ト云ヘリ又幼者ハ年ヲ得レハ先タチテノミ老人ハ年ヲ失ヘハ後レテノムヨシ時鏡新

今之四　ふりはへてハ古今春上貫之歌ニ云クかすか
野のわかなつみにやしろたへのそでふりはへて人のゆくらん
大和物語云クかゝる心をへてふりはへきこえれとかむ
つましきすさとなし云々トアリ屠蘇白散共ニ正月元日ニ
用ル酒也荊楚歳時記云正月一日長幼悉正衣冠以次拜賀
進椒酒飲桃湯進屠蘓酒膠牙餳　容齋續筆巻二
云今人元日飲屠蘓酒自小者起相傳已久ト延喜典薬式云
白散一劑　白散歳旦以温酒服五分一家有薬則一里無病帯之足散一病気皆消　屠蘓一劑
屠蘓酒治悪気温疫辟邪風毒之気　心さしトハ和訓栞巻九云志ヲ訓
セリ心指(コヽロサシ)ノ義　心之所之也ト註セリ

書ニミユ虚柳南ハ歳始ニ不遜ヲ教ル
ニ似タリトイヒテ
白家ニハ長者ヨリ
飲初ム歳晩医ヨリ
人ニ屠蘇袋ヲ送ル
事ハ凝朝楽事ニ見
ヘタリ弘仁年中ヨ
リ始ルトソ
博物筌五十九帝云
屠蘇酒ハ白述椿梗
山椒防風各一分肉
桂五分大黄二分半
小豆十四粒
○くすしハ和訓抄
ニ醫ヲヨメリ藥師

ノ美也佛足石ノ哥
ニくすりしトヨメ
リ庭訓ニ醫骨トモ
ベユ
枕草紙云くすゑう
す3云々源氏云く
すしうふん人云々

元日ハ朱雀帝ノ承平五年乙未ノ正
月元日ナリ元日トハ王燭宝貫巻一云正月為二端月其
一日為元日白散をあるなりトハ白散ヲ元日ノ朝飲マ
ントテ或人ノシワザニ舟ヤカタノ物ノアハヒナトニ差シ交ミ
置キシニ風ニ吹キナクサセテ海ニ落シ入レノマズナリタリ
ト云コト也やうこハ船上ノ覆ヒナリたきめりハ挾ム也
ふきなくさせてハ附注本ニふきなくさせてトアア
リ又異本ニふきなづさせてトアリ評ノ曰ク異本ヲ
正シトス聞書ニふきなくさせてハ風ニふきなびか
うせてなりトアレト此説アマシ面白カラスいもあゝめ

蓬庵
舟やうこまきゝたきめりなれど風よふき
く附
なゝさもゝ渡ようれてそのまゝなりぬ芋も渡芋
坂田めう
そたぐこめもなゝのうやうれ物なきこそ釣りもゝ
しも宝
めもおすぐまぐ押年魚おゝあ面のえちをのみそもふこの
まふくゝ孔ちをおゝあ面もゝ見ふゆうあゝん
こへのうもの宝
やうふを糸よのゝぐ見ひやゝゝ九をのこぐ結
こぶのありくめの附
宝ナシ
をりこあ乃瓏のをゝ結ようらひくらあゝ
柱谷樹
そもゝ附
いうよゝをぞいひあゝる
ひゝ木イ
廿九日ヨリ正月三日マデ大溪ニ在リシハ舟モヤスラヒ元

○和名抄云芋ハ子遇反和名以閑都以毛

○本朝令云滑海藻阿良友俗用荒布

○西宮記巻一云内膳供御歯固大根瓜串刺押鮎焼鳥等付進物所トアリ源氏初音云こゝらしまむれあつまなぐさめのいたゞきもちあらゝをさへとりよせて云々久安七年正月一日台記云早朝参禮聞御

共ニ正月元日ニ用ルモ也　ちうこめハ原本ト資慶卿本トニハ坂田めトアリ定家卿本為家卿ソノ他諸本共ニ坂田めトアリ考証云ツ坂田めトあるハこの原本と附ぐためトアリ考証云ツ坂田めトあるハこの原本と附注とのこゝを云ぐめゝありしを文字の似さりしまゝみさうこめと字し誤りしを又文字ヨ直してうけアしなるゝ〜トアリ評メ曰ク此説モヨク〜穿シタル義也取舎ハ看者ノ見ニマカス今ハ諸本ニちうこめト改ム又考証ニ坂田めの搨ハ地名ヨもやあふん讃岐國香川郡ニ搨田とふ地名あり延喜式なとヨ讃岐の國より海藻を出せ〜るゝニたれハ坂田めハ讃

前次参高陽院御方次歯固手水如常云云兵範記云保元三年正月一日右大臣殿召御装束入御有御歯固事女房被供之云云世諺問荅問同日歯固ヨいひてもちひうゞゝまむうふるハいうなるるそや人ハ歯をもてよハひとするゞもろゝ歯ヨいふ文字ハよハひとまむなりをゞうこめハよハひをゝうこむるこ

岐國香川郡坂田よりいぶせ〜海藻ヨやあふんトアリ評メ曰ク此説ハ臆説取ルニ足ラズ芋トハ凹聲字苑ニ云ク葉似荷其根可食也海帯トハ延喜大膳式云正月最勝王經齋會供養料芋六合滑海藻二両二分トアリたかためハ和訓栞巻廿云源氏河海ヨ御歯固の事掌中暦ヨ云ゆとゝ以ゝり其具ハ内膳供猪宍鹿宍ありて雉鴨をもて代とゝゝうり世諺問荅ヨ歯ゆゝめハよハひかゝむる意ニ簠簋ヨ六月一日歯堅肝要也トモ見ヘタリこゝ〜よふ等トハ文ノ如シ　おしあゆトハ原本ハ〜あゆトアレト諸本皆ハ〜あゆトシ且ツ下ノ文ニモハ〜あゆトアレハ

うろなりもちひハ
近江國の火きりの
もちひをもちふべ
きことゝなり
拾遺物名　おゝあゆ
をゝゝゝのおきゑ
ゑせんとゝまへゝ
るおゝあゆをれ
ねぞゝとるべく
賀茂保憲女集云か
ゝゝろきおきな
おんなをゞゝめゝ
おゞゝきるをいひ
ゝゞめてあゆのく
ちをうつくゝゝゝ
げのうゝばぬもち

今ハ諸本ト下ノ文トニ拠テおゝあゆト改ムおゝあゆ
ハ延喜主計式上云火乾年魚押年魚著乾年魚云々
同書内膳式云土佐國押年魚一千疋云々江家次第巻一云元
日押鮎坏煮塩鮎一坏云々山田秋成云押鮎ハ今の干鮎の
ようや又別ゑ製あるものゑもあるゝゝいづれゑも喰つ
きゞこきもの故人々の口つきさゑぐむつゝゝげなるを
見るゑもその客のあやゝゝげなんをゑようけて物
ハなすべうめるをと用意のゐどおもしろきこのきざま
ここのもふ人々トアルヲ原本ニハあふ人々トアリ然るを
諸本ト上ノ文トニ拠テすふ人々ト改ム季吟云口子とろ

上ノ三十四

ひのゐゞゝゝゝゝて
云く
○鮎ハ和名抄云和
名安田楊氏漢語抄
云銀口魚又云細
鱗魚崔禹錫食経云
貌似鱒而小有白皮
無鱗春生夏長秋衰
冬死故名年魚
すふハ和訓栞巻十
ニニ吸唄吮毓ナト
ヲヨメリをひふへ
ぼノ行ニテハタラ
ケリ咂モ同シ靈異
記ニ嗅モヨメリ

きて游仙窟ゑくちすふとよめりこの年魚をくふ
ゑをたハふれてかけるなるゞゝ九重のゝと等トハ
九重ハ内裏ヲ云宮門ノシリクメ縄ナヨシノカシラヒラギ
ナド思ヒヤラルヲ云こゝ孜ヘハ和訓栞巻九云禁中ヲ
云楚辞ニ出タリ注ニ天子九門トアリ又九天ニナスラヘタル
ナリコヽカサネトモ云ヘリ一條ヨリ九條マテ開キシモ同
ジゝゝゝめの縄ハ古事記ニ出ツ今云シメ縄也正月之
レヲカクル年々ノ例式ナリ真淵云くゝゝ縄ハ書
記ゑ左縄端出とも端出之縄ともゝけり和名抄ゑ注
連之利之倍奈波日本記私記云端出之縄讀与註連同　とあり

楚辭九辨云君之門以九重補注云季有遂郊門近郊門城門皐門庫門雉門應門路門也

古事記上云即布刀玉命以屎久米繩控度其御後方云々

日本記纂疏云端出之繩註云左繩端出此釈其義又解其訓也繩者直之義神道以直爲本左者陽德取清明之義端出者絇索而不整雪其所餘之芒端也是質朴而不飾之意故以直

こハねをへぐつるもろしの〻之正月物いとするとて
くくる之宣長云ものりくめなりく今ハふ之繩之で
もれハおのづからくハをぶりて土つめといつるく
なり屎ハ藁の本をいひくめハこめすてゝくの土りを
きりすてずしてさすかゝこめときゝこゝろなハ之志め
繩事漢土ニモアリ則チ荊楚歳時記云正月帖畫鷄
ヲ戸立懸葦索於其上トアリなよ〜れゝ〜らひ
ひ〜木等トハ今世節分ニハ鰯ノカシラひゝら木ナド
門ニサス事此等ヨリウツリ来リシモノナルヘシ昔シハなよ
〜ナリシカ今ハイハシトナル是ハ時世ノ変遷ニヨリテ

清質爲神明之三德一條繩而比三德也畏者分染淨之義即今世注連是也云云

世諺問答云ちめ繩といふハ左繩ヨりて繩のたしをそろへぬハと左ハ清淨なるいたれなり端をそろへぬハきたなくなるんこさ此ハあまてるおかん神の天の岩とを出〜まひ〜時ちりくめ繩とてひろれるハ今のちめ繩

カクナリシヤなよしハ神代紀云口女自口出鉾以奉ル爲口安即鯔魚也和名抄十九云奈与之遊仙窟云東海鯔條也埃囊抄巻三云聞鼻ト云鬼人ヲ喰ハントスルヲハ鞞ヲ炙事ト名付テ家々門ニ指ヘシ然ラハ鬼人ヲ不可取ト云即示現也ひ〜ふ木ハ以呂波字類抄ニ黄芨ヲヒヽラ木トシテアリ新撰字鏡ニ云巴戟天比々良木社和名抄巻七云谷樹同上黄芩音琴ヲ和名比々良木楊氏漢語抄云杜谷樹ハ杜音江和名同上一云巴戟天四季物語云つゐなの根ハ中略いと〜のちさゝ地ひゝらぎのわこいなやらふ家ヨハ百數なふてもあるヨなれとも
こゝヨ大内ハう〜もりの司此例としてつらふまつれり季

なり云々
和訓栞巻十一ニ志
りくめなハ左縄
モミエ左縄ハ日道
ノ左旋ヲ象ルトイ
ヘリ西土ニテ左搓
ノ打縄ヲモテ鬼子
ヲ縛スト云コト道
家ノ術ニ有トモ云
ヘリ
熙朝樂事曰正月朔
日挿芝麻梗於簪頭
謂之節々高邦俗謂
之司命索

吟ハ此日記ノアリサマヲ見ルニ元日節分ナリシヤトアリ然ルニ
長暦ヨリ見レハ節分ハ去年ノ十二月廿吾ナリ今吟失考
ナルヤいひあんりゝいひハ謂ヲ去ナリ
二日なわ大こなわ（くまれりイ）こうまつ純ヲ薄師（こうイ）（新司附）のきけ
おこせしおこ
講師ヲ異本ニこうしと假名ニカク誤リ〻真淵云クヲ
ゝもたなむけ〳〵こうる講師なりもの酒ふきまゝの物
酒なむなり
三日おなしゝこころなる祭ゝこのぜ波のまゝ（なゝ）〳〵〳〵と定ハ
をゝむやあんこゝふるゝ〳〵

上三十六

こてろをそなゝ〳〵トハ和訓栞巻九云伊勢物語ヲ見セ
ゝゝなゝ〳〵ハ万葉集ヲヨメこゝ心ヲ由縁なき義ヲ
やをゝなハよゝなと同〳〵といへり常ヲ無心許とかけり
延陵季子カ吾心已許之より出たるヲも謝霊運ノ詩ヲ
延州恨沁許ともいへり正字通ヲ許ハ所也といひ漢書ヲ
心本ともヲクへたり此一段落ヲ見聞抄ニ解シテ曰クうちつ
つき日よりれよゝぬゝ風ヤ波のヲれををゝ
をゝむるヲやと思ひつゝいへるなり大鏡才三云佐理
大貳よのてゝきの上手ヲて任をてゝのゝられなるヲ
いよのヲ人なるとまりヲて日いゝどうあれうゝれお

續日本紀巻二云大寶二年正月丙子造宮職獻杜谷樹長八尋　俗曰比々

詞集集ニ

程もなくくるくると思ひ〜冬の日はおろそなきわそみけり

新撰字鏡ニ忙怕ヲらくろをくなるトヨメリ又心胸ノアタリヲ心モトヘイヘルコトモアル由

いまハ伊預ノ國ナリ

もてあ〜そて風おそろ〜うふきなとするをすこしなるふりていでんとしこまんハおけ〜やうのこけすりぬかくのミしつ日ごろのすれハいとあやしくおがしてものとひこまんハ神の御こゝとのこゝふまきるべきすもなく〜いろなるるみうとおそれ玉ひろる梦ヨそえこまひろるやういこしきけごうきさ身〜こゝろをとこのおゝてこの日ゝあれて日ゝろへこまふいおのづゝへこまふるなりそれいよゝづのやしろヨ額のかゝまきるにおのゝもとヨしもなきゝあ〜けれかけんと思ふみなべてのまして〜せんゝいとゝろく侍れハ

あやしハ和訓栞巻二ニ奇ノ字異ノ字チヨメリなやト嘆スル詞ナルヘシあやしノあづなト云ハいやしノ美トモイヘリ神代巻ニ神モヨメリ

たゝるハ和訓栞巻十四ニ祟ヲヨメリ神人禍ヲ云ヘ徐曰禍者人之所召神因而附之トミユたちなるノ美たつハ腹タツノ意なるべしちうノ反たナリ又

ゝれまゝ〜せなゝらんと思ふよりこのをりなゝらでハいゝゝとてとこめなりたるなりとのこまふみ云々今人文ハ大同異合せ解スベシ

ゝるくせ〜ゝ（宮逆妙）ばえんでゝ（定）ぶてまきゝ〜酒よきこと（定）たいまゝ（定）ゝれりこのゝ（定）うゝ乃物（定）をそゝる人こなかわしもえ（定）あ〜でいさ〜けゝ（定）ゝるぶせ（定）きゝ（定）せ物もなゝ〜みきハこしきゝ（四拍）やゝなもとゝまゝ（四拍）るこゝちゝ

「まきつとハ姝壽院本ニ昌連ト文字ニカク其父祖家留ナラス「なかゝもえあゝて等トハ季吟抄ニ云ク伊勢物語ヨたゞなをやハあるべきて侍るに同しく道の字

癈ヲヨメリ
いつか萬葉ニ何時ヲヨミ菅家萬葉ニ幾ヲヨメリいつハトイヘルモ同シ古今集ニいつハトハトイヘルモいつトナリハヲソヘタルモノこいつをとも
おもハぬト云俗語アリ後拾遺ニ
おもひあるへもあけるせ中をいつをいつともすくすなるゝ
伊勢物語云あめのしたいろごのみの

なるべしゝごはしもえあゝでとの意也真淵云クなゐハさゞといふ同し万葉に默然をなゐみともゝゞ
ヌともよこ又さゞ今をなゐ人ともいへりしもハひいるく詞
みゝてその言もつゞなるもすり必しもなどいふしもヨ
おなゐ〳〵私ニ曰ク伊勢物語ニたゞなゐやハあるべきト云詞
モ見ヘタリ真名本ニ直哉ト書リ只ニノミアルヘキ事カハノ
意ナリ猶ヲ可止之辞ト注スルニ近シ文色このミノ歌ニハ直そ
ありけるハ只歌ト云義ハなそノ言ハ古ヘ止ニノミイヒテ下
ニ付ルコト万葉ナドニハナシ古今ノ今本ニ秋ハ猶てふ言ツア
ルハ後ニ書キ誤レル也古本ニモ家集ニモ此歌秋来ぬハ

ふるてハなゐそあり
源氏花宴なゐあふしに弘徽殿のゐそぐのふ立ありくまへ
万葉集ニ默然不有ヲなをあらしトヨメリ源氏ニモ此詞又タヽトモヨメリ又タビトヲ直人トモ云ヘリ又同集ニ猶哉トモヨメリ拾遺集ニさきしときなをこそ見しクもゝのなをなれ

トコソアレ後世ハ誤ヲツタヘテイヨく誤レリ「いさゝけヨ
ざせさす等ト原本ニハソきゝけとさせさ巻物なし
トアレト今ハ扶桑拾葉本群書類従本ニ拠テ之ヲ改考
証ニ云クこゝの詞のこゝろハこの歌をうるくるたゞよハあ
いさゝけるすそ〳〵せんと思ふよ祈申るれバ
さゝ物もなれバみぎいしきやうみハあれともその
きたる人こヨこのゝゝろまうるこゝちとなり「みきゝ
ハみぎたひ也和訓栞巻二十二饒賑賠ノ字ナドヲヨメリ
和ノ義也新撰字鏡ニ伽ヲみぎハくしトヨメリ口語ニみぎ
ヤかトモイヒ出羽ニテみきゝろトモイヘリ

ハをしくそ思ひな
りぬる
○なを〜ハ和訓栞
巻十九ニ直ノ字ヲ
ヨメリ猶ト義一ナ
リヨテ猶ヲなをし
トモヨメリ神代紀
見ユ
儀禮ノ注ニ猶者有
故之辞トアリ
伊勢物語云いさゝ
らがるゆさゝをえせ
て云ニ真淵云むくい
せねバまくるゝゝ
ちもるがり
日本記ニいさゝら

吾このせなるやまぬぎ狩おれ〜をこそまつらめ人こそ
きえぬ(資扶)
おな〜ところあり等ハ原本ニハおなじ所ヨあるを
トアレト今ハ諸本ニ拠テ改ムなをハ猶ノ字尚ノ字ハ既ノ字
ト反對セル意也仍ハうハゝぬ意也歌ニまぢこ又やハリト云
意ニモ用ユ上世ヨリ源氏物語ノ比(コロ)マデハまぢことふ意ノミ
也久〜こ此月のうつゝも秋ハ狩トヨメルハ猶ハ似也ト注セ
シガ如シ又いまゝ此意ニヨメル歌ハ後ノ事ニテ古歌ニ見
ヘズ猶還也ト注セシ意モアリ今ハ似ノ猶ヲ以テ解ス
ヘシ

輕小聊等ノ字真伊
勢物語ニ簡略ヲヨ
タリいさゝけ又い
さゝきトモ云ヘリ
いハ發語さゝヤク
ナル義ニ素冠ノ詩
注ニ聊ハ猶且也ト
ミユ又聊不敢博大
之辞ト注ス又薄モ
ヨメリ十分ナラサ
ル所ヲ安スル意有
トイヘリ又苟ヲヨ
ム苟旦草卒ナリ
和訓栞巻二十二云
クえぞニ ノ國ノ
きハひゝ云コトヲ

六日きのふ昨ごとし
今日モマダ〜昨日ノコトク風波ヤマネハ同シ處ニアルヲ
云こと〜ハ和訓栞巻九ニ如猶似若ナトヨメリ日本
記万葉ニハごとしとかりモイヘリ古今ニモ見ユ句調
ノタメニ略セシ也似ハ詩詞俗語ニ限ルト云ヘリ字書ニ
ハ如似也ト見ユ如同トモ用ユ読ナレハ本字ノトホリナリ
七日ヨなりぬおれどこすをしあれとふハあをうま(青馬)
なと(定)を又人どこひなゝ(いと定)ゝで波ぬ〜ゝきぞ(のく定)ゝあるこゝふ
あいぶつ(アヒグツ定)人の衆ぬ(野イ)いはゝ若あるあゝより鯉ハ(あも)原本妙聞書なくて
(朝)ゝあるまもぢぬ川のも海ぬもとまの心もび(くも定)つま(をもイ)

ちやんト六
そハ上ニなゝイヘ
ハ下ニそトウケ上
ニそトイヘハ下ニ
五音第三ノ韻ニテ
受ルハ古語例也又
しゝきニテ受タル
モアリ瓦テそハ強
タ押テイフ字也又
そト留テ疑ヒタル
アリたゞ白妙の衣
うけしそ
そ幾世すむへき水
の心そノ類ゝ又上
ニなトイハテモそ
ヲ禁止ノ辞ニ用ヒ

みけひつけておこせてるとそうなることよりれてきゝなど
若菜籠
そゝろけたわおとうなぞそふをゝゝせてる雨有そあらさ
雉
あさぢふにゝ砂べてゝあまぐるもなきいけすつゝ
つるゝみ東なるうゝ紫いとをこのゝうゝこのいけとふる
ゝ
ふれ名なる出ふよき人乃男ようそゝどりて行そふ
なりこの毛種ひ物ゝ（とり空）ゝハまでよみれゝこまで
（おゝあべてイ）（皆人くる空）
あきゝちゝゝ海まとりゝをゝつゝゝをうちて海成
（つなゝ附）
さへおどろうゝ波をそつべゝかくゝこのあひゞ
（空ナシ）
ゝこあゝおゝ海ゝ乃ゝ
「くふハ今日也あをうまトハ河海抄巻五云正月七日看

ヌルアリ古今二
山吹ハあやなく咲そ
をゝんゝ植ゝんノの
今宵こなくふ

青馬青以日為本天有白龍地有白馬是日見白馬
即年中邪氣去不来也真淵云ク青馬トゝヘと實ハ白
馬なり古言ゝ白きを青とゝへる例青雲の白肩之
津とゝひ又青旗とゝるも全くハ老ぶハゝゝ万葉の
家持卿の哥ゝ水鳥の鴨の羽ゝろのあを馬とよめる
も鴨の羽ゝこゝ青き毛ゝろの馬とゝふみハあゝす
あを馬ハもとより白き馬をゝふなるを」と青とゝふ詞ゝ
いひろけゝとゝ面そのゝぐひおかくゝ面てハもしゝ
より白馬をゝへり今云クあををますハ日本紀ニ白馬ヲヨメ
必ス青キ色合ヲ兼ルモノ也萬葉源氏等ニ此リ瓦ノ物至テ白キハ
意アリ白馬ノ節會ハ正月七日ニ行ハルヽナリ文徳實録延

万葉第廿云天平宝
字二年正月為七日
侍宴大伴宿祢家持
作歌
水鳥乃可毛能羽能
伊呂乃青馬乎家布
美流比等波可藝利
奈之等伊布
水鏡云弘仁二年正
月七日ちぐめて青
馬をゐ覧ぐき
公事根源云礼記ニ
春を東郊ゑむりへ
て青馬七疋を用ふ
るとあり七八少陽
の數正月ハ少陽の

月なり云々
逸周書巻七王會解
云周公旦主東方所
之青馬黒厳謂之毋
兒
拾芥抄ニ建禮門云
青馬陣謂之南面僻
伏中門
定家卿ノ哥ニ
霞結の草のとさゝ〜の
淋しさを霞ぬかゝる
春の山里
古今集
おもへども猶うとまれ
ぬ春霞かゝぬ山の
ゐぐしとされもへハ

喜式等ニ青馬トモ書ク漢語抄ニ驄ハ青馬也トイヘリ
新撰字鏡ニ驄ヲアヲキ馬トヨミ白色又青色ト注セ
リ又水あをアリ鼠ちをアリ駰又騅ヲヨメリ「波の志
ろきハ上ニアル文青馬ニ對シタル詞ハナリ」かゝる
ハ和訓栞巻六ニ懸字ヲヨメリかるノ反ゝ也波カヽル
ハ沃ノ字ノ意懸ルノ義ヲ轉シタル也俗ニ物事ニ打
カヽルトアルハ着ノ意ナリかゝぬ嶋モナレト云ハ船ニ
寄テイヘリ「人の家のいけゝ名ある所より等トハ
考証ニ云クいけハ土佐國の地名なるへしいけとゝ
所の人の家よりと心得へしトアリ今考ルニいけハ

姓字ナルヘシ「人の家の云々等ヲ異本ニ人の野のト
アリ是レヲ親シトス此段落ノ文意ハイケト云名アル処ナレ
ト池ニアル鯉ハナクテ川ノ物海ノ物ナドオコセリト例ノタハ
ムレカケタルナリコノ鯉ハなくて云々トアルチ原本ニハ鮎ハ
なくてトアレト正月ノ始メニ鮎ノナキコトハ勿論ナリ然ルニ
諸本皆鯉ハなくてトアルニヨリテ改ム案スルニ鯉ト鮎ト
文字ヤ同シケレハ自然ト誤リタルモノナルヘシ又原本ト聞書
ニハあゆハなくてトアリ則チ聞書ニ云クあゆハなくてハ鮎
ハいとゝひの物なるにそれをハおくゝすしてこと物をのミ
おくりたりとゝあゝ今聞書ノ説ヲ助ケテ白クコノ鮎ハ午鮎

和名抄木器類似厨
向上閑闥器也撮壤
集云長櫃ナガビツ
枕草子云萩もゝ花な
どゝ乱てゆゝしうおぼ
ゆるものゝもとゝ
のもきなゝひきさ
けてゝゝぶりにほ
りて云々
○ひつ川ハ山城紀
伊郡木幡里近キ小
川也夫木集二
日暮なハ岡の屋ゐ
こそ伏見なれ以て
渡ゝん櫃川のもゝ

ナルヘシ干鮎ハ正月ニ用ルモノナレハ也鮎ノコトハ前ニ釋ス鯉ハ
和名抄巻十九云七巻食経云鯉魚上ノ音里和名古比野王按ニ鮎ハ
胡闘反説文云鰥胡尾ノ反上爾雅ニ云ク鰥音度皆鯉魚也
ふなとハ鮒也和名抄巻十九云本草云鯽魚上音即一名
鮒魚上ノ音附和名布奈罍字苑云鰆鯽績音積今按ニ
川のも海のゝ等トハ川ノ魚モ海ノ魚モ也ソレニコレニ物ヲ
名ヘテ長櫃ニ入レテオコセリトナリ ひつトハ和訓栞巻廿
五ニ云万葉ニ小竹櫃ヲ志のひつトヨミテ訓ヲカレリ櫃ハ
引みつる義ニヤ和名抄俗ニ長櫃韓櫃折櫃小櫃等
名アリトイヘリ式ニ明櫃アリ「とうなこ」いれてきゝ

雲雀ハ和名抄十八
云雀禹錫食経云似
雀而大和名比波里楊氏
漢語云鶺鴒倉庚ニ音和名
同上
太神宮儀式帳云正
月七日新菜御羹作
奉太神宮并荒祭宮
供云々
菅家文草巻六云弔
亦嘗聞千故老曰上
陽子日野遊厭老其
事如何其義如何倚
松樹以摩腰習風霜
之難犯也和菜羹而
啜口期氣之克調也

などゝ花をつけたり等此文原本諸本共ニ脱セリ今ハ
為家卿本附注本等ニ拠テ之ヲ補ウスベテ物ヲ草木ノ
枝ニツクルコト一ツノ式ナリ伊勢物語云なゝ月ちゝり
に梅のつゝり枝まきゝを付てなるとて云々落久保
物語云あをきこゝろのつゝにこがねのゝちばなゝれて
あをきふゝるゝ五葉ゝ枝をつけたり云ゝ増鏡云
雲雀といふ小鳥を萩の枝をつけたり云々鳥ヲ草木ノ
枝ニツクルコト河海抄武家調味記等ニ出ツ今畧ス今
日ハ七日ナルニ白馬モ見ヨハソノ儀式ナキニこゝろなゝ分リゝ
ふヲレラセタリト云コトナリ「ワゝなハ七種ノコトナリ大

云々
西湖志餘巻廿云立春舉酒則縷切粉皮雜以七種生菜供奉
莚間蓋古人辛盤之遺焉乎
根津國苑屋郡中尾村ノ入生田ノ濱ニニテ若菜ヲ採テ京ニ献ル七種ノ一ナリ之ヲ生田ノ若菜ト号ス摂津志ニ澁蔬ト云
伊勢神宮ニワカノ七種ハ七見村ヨリ奉ル齊宮旧蹟ノ北

神宮儀式解巻廿ニ引年中行事云正月七日新菜御饌事云々卯尅也公事根源云供若菜内藏寮ナリ
ひる内膳司より正月上の子日これを奉る寛平年中
より始まることまや和訓栞巻十九云今水無瀬ヨリ献ル康
富記ニハ文安五年白山城國經喜郡大住献七種菜
ト見エ荊楚歳時記ニ人日以七種菜為羹トイフル文ニ拠
トモ七種ノ名ヲ著サズヨテ古来其説區々ナリレ台德大相
國時ニ諸家ニ命シ其故實ヲ訂サセタマヘトモ一次シカ
タキヲモテ世俗用來レルヲ採用ヘキヨシ仰セ也トイヘリ
七種ハなづなごぎやうずく

ナリ式ニ多氣ノ郡奈ニ美ノ神社ミエ七真草ノ略ニヤ万葉七、相菅ト同シ
真淵云七草の若菜のゆとりく定まれるゆあるよりしる
枕草子よなくくさのゆをいひてつめとなかくなぐさこそつれなけれあまくしはれば菓ゆりゆゆとりいつり七種の名さぐめあゝばうくハよもぎはこべ春のゆゆ

あろ、ほとけくさ是河海抄公事根源ナトノ説也歌
村雑本抄ノ歌ニせりなづな御形田平子佛のさすゝれ
すゝしろこれそ七くさトアリすゝなハ即チ菁也或説ニ
田平子ト佛ノ座ハ物也又かいふけなとイヘリ埃囊抄ノ
哥ニせりなづな五行たひ〳〵佛の座あゝなみなし
これそ七種トアリあしなハ菁ナリとノなしハ巻耳也七
種ヲ打ハヤスコトハ歳時記ニ正月七日多鬼車鳥度々家々
進門打戸滅ニ燈燭禳之ト見エ鬼車鳥ハ鵂鶹也ト
イヘリもやす詞ニ唐土ノ鳥ト云ハ是レヲサスナリ七種ノ
粥ハ延喜主水司式正月十五日供御七種粥料米粟黍子

をいろ〳〵つあるなり」

秋ノ七種ハ和訓栞巻十九ニ萩尾花花葛常夏女郎花藤袴朝貌又一説ニ梨桃大豆角豆熟瓜茄子薄穎トアリなつなハ崔禹錫食経云薺也蒸煮噉之はこへ〳〵ハ本草云藜蕾也妹酸平無毒者也セリハ芹也陸詞切韻云生水中也本草云水芹味甘平無毒一名水英あさなハ蕪菁

菫子稗子胡麻子小豆ト見ヘタリ拾芥抄ニハ大角豆菫子粟柿豇豆アリ黍稗菫胡麻ナシ公事根源ニ大豆十五日粥ニ食フコトハ十節録ニ見エあさゞりふの野邉ゑし等ト真淵云此ゑのあさぢふハ浅茅生ゑふとハ其物を生ずるゑをいふあをふを粟田まめふを畠など書こゝひがりり山田秋成云水もなき池ゑつゝとハ浅茅生の野ゑみる池のあせゝるゑてつゝとるといふを即浅きゑゑ調ゝゝる物ゑれだゝとまゑ〳〵ゑゝき物ゑもあゑをと用を考ゝる事ゑれり「いとハ辞ニ云ハ日本記ニ最字万葉ニ甚ノ字痛ノ字ナドヲヨメリいたくト

也本草注云北人名之蔓菁揚雄方言陳宋之間蔓菁曰葑ごぼうハ漢名鼠麹草すゞ〳〵ろ漢名蘆菔俗称大根ほゝけくさ又云ほゝけのぎ又曰たひよこ漢名鷄腸草或為蓮藕誤也

云ニ同ジ「をゝしトハ哥ヲイトヲカシトホメタルナリ」をふつゝゝトハ漢書ノ故字ノ荘子馬蹄篇云ク鼓腹而遊此ノ意アクマテ物ナトウケクヒテハラツゝミナドウナテタノレミニレヲ云「なみゝてうゝ〳〵トハ是レモ漢土ノ古事ナリ文選本玄虚海賦云於是鼓怒溢浪揚浮更相觸搏飛沫起濤等トアリ

いまゝゝ破子きゝこりその人その名などぞやいまゝゝ

いでんそ人ゝゝまんと思ふひありそなりけるとこのくいひ〳〵〳〵沼乃をつなることゝゝうゑ〳〵いひくとゝゝをゝふゝ

鵂鶹ハ和名抄十八云張博物志云鵂鶹鳥（休留ニ音漢語抄云以此止与）人截手足瓜棄地則入共家拾取之

史記范雎傳云伍子胥橐載而出船關夜行晝伏至於陵水無以餬其口縢行蒲伏誓首肉袒鼓股吹篪乞食於吳市卒與吳國云云

陶靖節集卷三云鼓腹無所思朝起暮歸服桂川地藏記云凡當社午日礼尊者御々供御神樂湯立腹

ゆくさきいろめつまゝ物ゝ思ふ人のもとなれて
なるのんそれやまきふんとそめるいと大ごゝ高なるべし
そそ群るものゝ（きゝゝ群）ものゝ（もイ）ふいのぐあるんこの歌をれ
うもあるもれどれ（イナ）ひとりもうゝ（もゝ）さぶきろつべき
人もまどれ（定ナシ）れどこれをのこいてこゞわ物（て附）とのこく
ひて物ふけぬこの夕ぬま（扶）まゝ〳〵ぶとひひてこちぬ

此文ハワリコモタセテ来ル人アリシカ其ノ人ノ名ハ忘レタリシヲ今思ヒイタスヘシトナリソモ此人来ルハ別レヲ惜ミテ訪ヒ来ルニナラズ哥ヨミテホメラレント思ヒテキタルナリトカクナニヤカトイヒテヨミイテン哥

鼓以下臨時相撲法樂連歌等也云々

あもれハ和訓栞巻二云日本記ニ可怜ヲヨメリ憐受ノ意也アヽト嘆ク声ヨリ云詞轉シテウツクシム意ニモイヘリあもれひあもれふナト書ナラヘトモまみむめもヲ以テハタラケリ古語拾遺ニあもれあなおもしろト云コトハヽ大晴ノ美ト見ヘタリ今あつもれト云美是也逋ハ俗ニヨシアルコトヽモイヒテハカク日頃（ヒコロナヾ）浪ノタリナルコトナド患レヱ云ナリ

わりこハ和名抄巻十四云樏子（カシヒカ）飾（カヒヒクル）蔣魴切韻云樏（カシヒカ）今按俗所語破子是ヽ破子ハ読和利子（ワリコ）樏子中有障（ツハイ）之器也

わくさきノ歌ハ文ノ如シ大ごゝとアルハ哥中ニ立白浪ノ聲ヨリモワカ聲ノマサラントアルヲサヾ大聲ナラント紀氏ノタハムレニアサケリテ云ヒシモノナリコノナルベシトイヘル語ニ心ヲツクベシアサケリタル證ニハ次ニもてくる物ゝりハ哥ハいかゝあゝんト云ヘリ

これをのみいくり等トハ原本ニいさハりてトアレト今ハ定家卿本為家卿本附注本群書類従本ニヨリ

ノ造リ字也日ノ神ノ磐戸ヲ出タマヒテ常闇ノ世モ明カナリシニヨレハ憐受ヲ云モ天晴ヨリ轉用スル詞ナルヘシ

大鏡巻八云西北京のそこくのあるいろこくきき〳〵る木のやうぐいうつくしきゞ侍りしをわりさをしろバいへあるしの木ゑこれ由ひこまひぬてもてまあれをいたせさうびどうバある

テ之レヲ改ム「あれ等ト眞淵云クあハれハあ〳〵ト云フ聲ヨリいでおもしろきとのすも愁ふるこゝろまも伺まもなを之りなけきとゝふも長息ヲイあ〳〵と息をなりくするをいふあハれ聲のまゝをいひなけきいこゝろをいひていハおなじことなり」いさゞりて等ト眞淵云クいさゝりてハ物をわむるやうなをしる詞ここハ哥のゝろけれハうゝりてかめてのこすぐゝてうゝしもせぬなり」まうすハ聞書云まうふぜハまろふんずるをねてこのむゝしようゝせなりうち奴い出立スルナリ

やうこそハとゝてもてまありていひしをなふそゝてハ後じハをバ女のまふてらを待りハる

勅撰ばいとゝもかしこゝうぐひすのやどハをゝハバいろバこゝへんゝありハるるあやゝしくおがめされてなるのゝあぞゝこづまさせこゝまむれいつらゐきふぬゝのゝむをめのもむ石なりハ是」

ある人北ゐのゝ〳〵ハなるこゝろそうにいふまうこゝろ孔のゝ〳〵をんとゝふおどろかていををのきすう那ゝをんやハをつるくいをや之のゝとゝふまこうゝ爲ゝをとゝ立ぬる人をまちてゝをんとゝとゝあるを取ふけぬとゝやあゝんゝ爲ゝんやゝゞそゝゞよゝ為そゝゝいこゝゞよゝなるとゝつゝこうゝゞりゝをゝふこゝゝゝハさゝゞりゝをゝゞていをゝゞ之ゝひてをゝゝゝゝゝ

ゆゝゝ人もゝをゝゝゝも神乃なゝゞ川こゞきハのゝゝこゝをぬをゝまゝゝわゝゝれとゝんゝあるゝゝゝをゝふゝのゝうゝゝゝゝれゞゝゝやあゝんゝいと思ハゞなりゝゝハこと

古事記云字麻良糸
岐許志母知袁勢麻
呂賀知云々
伊勢物語
つゝねづゝあづまぢ
〜まろがれをき
まけじないもろざるま
竹取物語云そも〜
いろやうはるんき
〜ろ〜ん人ゐろあ
いんとおぼを云
宇津保物語と〜が
げ云そも〜ろぎも
のといへどとおお
わろとなるぬいを
まぎなり云〜

みてゝ行ゝえせん（定ナシ）おんなおき翁ゆを〜づぼ〜
行ゝ人ともあまいのふもあれるみ〜家あ〜ぼやらん
とゝ〜おのれぬめり
「ある人の子等トハ是レハ紀氏自ニテノ子ナレド例ノオボ
メレカテカク云ヘルカ又實ニ或人ノ子ニテモアルヘシ然
ルニ紀氏ノ子ノ哥ヨミシコトアリソレハ後撰冬おやの
外ゐまろりておそく久りくれハつゝハしくる
神無月ふるれあるもゝるる日をきゝまつ不
クハけるとそ思ふト後撰正義云クこれハ貫之の女七

真淵云それとも〜
をおこ〜ていふ詞
をゝきまてそも〜
といへりもハ助字
なりもをそへて
ふる古言ゐおゝ〜」
万葉十二
相見欲爲者從君毛
吾曾益而伊布可忍
美爲也
後撰集ニみちの国
へまかりける人ゐ
火うちをつゝいす
とて書付ける
貫之
折〜る打て焼火の烟

歳ゝそよりとゝふ父貫之内裏よりおそくゝへり
くるをまちゐびてよりゝ家集等ハちゝまろがどハ
とあり云々又此女の勅なれハいとも〜こしうし
ひすのやどいとゝいゝぐこゝへんト讀ニ哥ノコトハ
此書ノ紀貫之傳ニ出シタルハ今ハ畧ス まろハ自ニテ
ヲ云コトニテ卑下スルコトバナリ宣長云まろとハとれ
おのれなどいふこと〜さて師の説ゐとつゝ〜まろ
といふこと〜いゝこさをゝとありとゝあるむゝへて
ゝとなくまろがれとふ意ゐそつたなゝおろゝな
るゝ〜の称なりといまれゝるハ古への物言とも

あふハ心さすらもを志
ばべゝそおもふ
爲家抄ニきすらハ
腰刀ゝ燧ヲ附ト見
ヘタリ日本武尊ノ
故事ゝ剣刀ノ畧ナ
ルヘシ
古事記ニ令見辱吾
神代記ニ金吾恥辱トアリ
椎モ諸書ニ志ひゝ
書ケリ古事應神記
ノ哥ハ志ひヽトヨ
マセタマヘリ通ス
町ノ謠ニいちひか
志ひマテハ志ひト
ナラヘイヘハモト

きこゝ天ずりなこてろめきてこそおりゐれこゝ々
よゝてんや等トハよゝてんやハヨミハセゞサレドモレ
ヨミツベクハハヤクイヘトナリそもゝハ和訓栞巻十三
云光仁記ニ見エ抑字ヲヨメリサテモゝノ急語ナル
ヘシ轉語亦然之辞ト注シレ又反語ノ辞也トイヘリタヽシ
又シカレト譯ス又發語ノ辞ニモ用タリ院本ナドニ云是
レナリ又禮記ノ抑ノ字石経皆作意古抑意通スト
モ云ヘリりぶらしハ字類抄ニ訝ヲ訓セリ不審ナル意
也万葉ニ欝悒ヲヨメリ今ノ人不審ヲヨメリさすら
ハ和訓栞巻十云讃嘆ノ辞マタ務テ本ヲ忘レサルノ

ハ香椎トモイヒシ
ニヤスイノ音ヲ轉
シテ訓セルゝトイ
ヘト繁實ノ義ナル
ベシ
今按ずるふなゝぐ
川ゝらづありひと
つハ伊勢の國なる
なゝぐ川ゝそハ後
撰離別をゝこの伊
勢の國へまろけハ
るゝ
まゝ人志ふに
君り由くゝるあり
てふなゝぐ川まづそ
そてふぞなるゝ君ゝなる

意アリ大ヨソ物ニツニカケテイウ辞ナルヘシ字書ニ併ハ相
玆也ト注セシ義ニ似タリ萬葉ニ志らすゞトヨメル是也然す
るかゝゝとイウ語意也ヨテ真名伊勢物語ニハ然ノ字ヲ
ヨメリ世ニ流石ノ字ヲサスカトイフ辞ニ用タリ流石ハ晉ノ孫
楚カ石ニ漱キ流枕スト云故事ニヨレリさすらニヨク牽合
セリトヨメリたゞゝ和訓栞巻十四ニ恥辱又慙ヲヨメリ霊異
記ニ媿モヨメリ志ひてハ和訓栞巻十三強字ヲヨメリ孟子ニ
強酒トイヘル類也ツトヒルト意通ス誣モ同義也菅家万
葉集ニ見エ神代記ニ固モヨメリ也く人もノ哥ハ文ノ如シ
季吟云クさきの哥ゝもくさきにとゝいおれてなん

これハ伊勢の國こいま一つハ陸奥こそハ相摸集
こちのくにそでの
ゐくりのなこそ川の
うちはなれてそふる
こゑ陸奥こいまひ
とつハこゝ名所は
あゝ〳〵て涙を川
はたとへゝこゝ
なるも名所はなふ
き淑を川はたとへ
てさてこゝハとハ
いへり
渚ハなきさトモヨ
メ神代巻ニ波瀲ヲ

とふをうけてやく人もとまるもトヨメリけみて川ハ名
涙ヲツヨクイハントテ川ニナレテイヘルノミナルヘシ別ニ義ナシ在
ノ國ニ涙川ト云ヘルナレハヲタヽ涙ノオホキヲ川ニナソラヘテ云
ヒレモノカ伊勢國ト陸奥國トニ涙川アリ是レニ古人ノ哥モ
アリ又ハ涙ヲ川ニタトヘテヨムアリ是レハ素ヨリ名所ニ
アラス豊後ノ國ニモ涙川ト云ヘルアリ是レモ名所ニアラズ
こきハ渚也水邊ヲ云ナリ　このくハいふもの等ドハ聞書
云クのようなもよくよこたる物なと不むるこトバ
なりうつくし等トハワカ子ヲウツクシミアハレミヲ云古
事記萬葉ナトニ愛ヲウツクシトヨメリ此ノ処ハワカ子ヲ

なきさトヨメリ古
事記ニハ波限トカ
ク和訓乗巻十九云
泪ハ字彙与涙同シ
なみゞ川ハ詩ニモ
涙川ト作リ世説ニ
モ涙如傾河注海ト
ユ藤原惟方ハ長門
ニ経宗ハ阿波ニ流
サレシニ経宗ハ赦
サレテ還リ惟方ハ
サモナカリケレハ
ヨメル
此世をも涙むときけハ
涙川流れ〳〵よりもぬ
る〳〵神うれ

愛ス心ニテ嫗ヤ翁ノ哥ナリト云トモマコトレクオモハル
ト云意ナリ　おんなハ嫗也おきなハ翁也和名抄ニ翁
老人也嫗ハ老女之称也此処原本ニおんなおきなな
てをしつべしトアレト今ハ定家卿本為家卿本扶桑
拾葉本群書類従本等ニ拠テ之レヲ改ムたよりあ
ハやふん等トハ又タヨリモアラハヤラントテ先ツウチ
ヨカレシナリ　おこのれぬハウチヤルコトナリ
ハなさたるあれあゝ行あれドおけりこそハのイ
涙ぞいるこゝもとをアケて業平ハ男乃山の
みげさくれぞもあゝけすんやといふ所ハおぶゆる

ヨテ又召還サレ又
玉葉集ニ伊勢國修
行シケル道ニテ塩
ノヒタルニミワタ
リト云濱ヲスキン
トテト見ヘタリ南
ハ庄川北ハ古城川
中ハ涙川ニテ三ノ
川スチナリシカ南
北二川トモ涙川ト
會テ今ハ一ツノ流
レナリ
名所拾遺ニ
みわくりの中ゆ流る
涙川神岡やまの
しつくなりけり

ゆ波をみくまのうらのはまゆうはいとしらなみをさへくりかへしてはまをもあらけんとよるこそはいまはかなしきもひいでゝある人乃なゆ(イナシ)ゑにしを

後撰羈旅

てらすなりのるこそはれなれたれ川いづるこゝろ

そあり集

ときわるはさはりなりはやかぜ風波ニせへられテ今日モナヲ大湊ニアルヲ云ナリ則チ八日ナレハ月ノ海中ニ入ルヲナカメテ業平ノ哥ヲ思ヒ出セレナリ

業平朝臣ハ淳和帝ノ天長二年乙巳ニ生レ陽成帝ノ元慶四年庚子ニ卒ス

山のゑの月ノ哥トハ古今雜上云あの

神岡山ハ阿坂ノ社ノ辺今佛寺アリ
伊賀蓮池村ニ涙川アリ定家卿ノ歌ニ
なみゝ川そのゐ上を尋ぬれハ神ふる山のしづくなりけり

三代實録巻三十七云元慶四年五月二八日辛巳從四位上在原朝臣業平卒業平者故四品阿保親王第五之子正三位行中納言行平之弟也阿保親王娶垣武天皇伊登内親王生業

なゝよまでぎもも月のうくるゝ山のもゝげてゐれ

ものゝなんトアリ

てる月ノ哥ハ後撰ニ貫之ト

シテ載スある人トハ例ノオボメカシテカケタルナリ

天の川

ゆづる寺トハ漢土ノ博物志ノ故事ヲ思ヒヨリテヨマレツルカ博物志巻十云曰説云天河與海通近世有人居海渚者年々八月有浮槎去來不失期人有哥志立飛閣於查上多齎粮乘而去十餘日中猶觀星月日辰自後芒々忽々亦不覺晝夜去一餘日奄至一處有城郭狀屋舍甚嚴遥望宮中多織婦見一丈夫牽牛渚次飲之牽牛人乃驚問曰何由至此此人具

平中累業平體貌閑麗旅縱不狗略無才學善作和歌中略卒年五十六

天河和名抄巻一引二並名苑云一名天漢今按名河漢一名八銀河也

博物筌二百四十三昴云天河或八銀河天漢トモ云水氣上而爲天河之説不可也是小星甚多極小者並如白絹至十月南轉故爲地所隔而不見自三月比轉而

説来意并問世是何處荅曰君還至蜀郡訪嚴君平則知之竟不上岸因還期後至蜀問君平日某年月日有客星犯牽牛宿計年月正是此人到天河時也「ざりける」八考証ニぞありける」ぞあの及ざななれバ之トアリ

九日のつとめて大湊より那波のとまりをおいんとて

こぎ出ぬ群こまこれたゞひよ岡のさゝひ打ちい

ときゝすなをくりはなる人あまたゞなる定なくゝに藤原言

實橘季衡長谷部行改らけん時鎧を乞い

でたまひ定ひ日ときこえおひなるる人こ

在地上故見也

牽牛尒雅注云牽牛一名河鼓比古保之又加比保之織女兼名苑云織女牽牛是也和名太奈ハ太豆女

たなばたゝひめ和訓

桑巻十四云棚機姫ノ神ヲシテ神衣ヲ織シメ玉フコト古語拾遺ニ見ヘタリ

コテ織女ヲタナハタツメト云ヒシヨリ織女星ヲモ同ク名クルナルヘシ。

ソハ助語也織女年一度牽牛ニ嫁スル

「ぞ定なしける人なりけるこの人このふかきみぎしに

この海も定おとらさるべしこゝもとゝ思ふ人うちこぎまれ

まゝゆくこれをこそおもふこゝおもふこゝそこの人ともおもひき

りるこゝてこぎゆくまゝ海のかゝりまゝとまかる定すゝる人も

とゝくなりぬ人もこゝえびすのあれ人もこゝえびすのあれ岩まゝと

つゝまるゝ思ふこゝあれぞこのひなゝ

うゝれどこの言をひとわごゝまゝやゝぬ

思ひやるゝゝうゝをゝれどもふみゝなれバ

ゝゝびやあわあ定わあんん

「つとめてハ早朝ノコトナリ新撰字鏡ニ日初出時也ト

コトハ齊諧記ニ出タリたなゝ妻てふ意ニ心得ルハ誤リ之神代巻ヲ哥ニおくたなゝいとヨメルハ弟棚機ノ義也七夕ヲ義訓スルハ後世ノ俗也理ナシ芳菜ニなぬかの夜トヨメリ

事文類聚云京師七月七日婦女望月以小蜘蛛在合子内次日看之若網圓正謂得巧

歳時記云此祭時陳

アリ 那波のとまりハ和名抄國郡部ニ土佐國安藝郡奈半トアリ日本地図ヲ見ルニ奈波ハ安藝郡西野浦ノ東南ニ在リ さゝらひハ境也界也藤原言實橘李衡ノ二人ハ前ニ出レハ長谷部行政ハ今初メテ見ユソノ父祖審ナラズ長谷部行政らなん等トアルなんノ二字ヲ原本脱セリ今ハ為家卿本扶桑拾葉本群書類従本等ニ拠テ之ヲ補ウ 内館より出たまりし等トハ考証ニ義アリ 一ニハ内館トハホヤケ館ナレハ御ノ字ヲハツクル又一ニハコノ書スヘキ自ラヲハ餘処人ノヨウニカキタレハ紀氏館ヨリ出レヲ出ヽうひしト云ナルベシ評ノ曰ク後義ノ親

瓜葉於庭中乞時有蟾子瓜上綱以爲得○枕草子云冬ハつとめて雪のふりたるはいふへくもあらぬ云々

拾遺裏傷 仙慶法師

ごくらくハなるけきかぶ
うきふしらどつとめて
いくるさとこそなりなれ

遊仙窟云忽把十娘手子而別行至二三里廻頭看數人猶在舊處立余時漸々去達聲沉影滅顧瞻不見惻愴而去行到山

シトス この人々ぞトアルぞノ字原本脱セリ今ハ為家卿本拾葉本類従本等ニ拠テ之ヲ補ウ こきたなゝ ゆくハ大湊ヲコキハナレユクナリ未至佐國ヲコキハナルニハアラサルナリ 海のわとりにとゝまる人もとわくなりぬ舟の人もとゝすなりぬ等トハ大和物語義経記ノ文体ニ似タリ大和物語云ク車ハ舟のゆくとえてえゆくすず舟ものりこる人ハ車をえるとてゆくておもしいていこきゆけハとおくなるまゝにあうハいとちひさくなるまてうねこせけれハいとこうなしくりけり云ゝ義経記云たゝひはあきもやゝすう

口浮舟而過云々
万葉三
何時間毛神左備祁留鹿香山之鉾椙之本尓薜生左右二
万葉二
後将見跡君之結有磐代乃子松之宇礼乎又将見香聞
妹之名者千代尓将流姫島之子松之末尓蘿生萬代尓
書記神功紀歌云宇摩比等破于摩譬苫奴知野伊徒姑播茂伊徒姑奴池云々・

うへりてハ田き行てハうへりし王ひたり峯にのぼり
谷みおりきたまふかとますげこ乃みえふみ
ふねどもハまづうちるじとふねくりゆまたらひ
ますげこのかえぬ不ともへどてらバ山ひこのひゞく
かとまそをめき久る云 今云ク大和物語モ義経記モ土佐日記ヲトリタルカ 思ひ
やる等トハ舟ニモ思フコレアリ岸ニモ云コト アレト甲斐ナ
ケレハコノ哥ヲタヽヒトリ言ニ人ニイヒテヤミストナリ哥ノ
意ハ思ヒヤル心ハ海モワタレトモフミヲヤルヘキタヨリナ
ケレハシラスヤアリケントナリ此文ノ中ニてこれどもト
云ヨリふみしなければトイヒテ文ニ踏ヲカケタルナリ

万葉八
黄葉乃過麻久惜美思共遊今夜者不開毛有奴香
鶴ノ異名仙客。照仙仙禽等アリ
葦鶴ハ日本記ニ川雁トアリ
六帖
まちやまの松のこずゑにすむつるを千代にもあかりと思ふへるなり
和訓栞巻十六云鶴ハ鳴声モテ名クルナルベシ田ヅモ同シ哥ニ芦鶴ひな鶴

かくて宇多の松原をゆきすぐその松乃かず
いくそばくいく千年へたりとしらずもとごとに浪う
ちよせ枝ごとに鶴ぞとびかよふおもしろしと見るに
たへずしてふねびとのよめるうた
見わたせバ松のうれごとにすむつるハ千世の
どちとぞおもふべらなるとやこの歌ハ所をみるにえ
まさらず
かくてハ斯也コレカクテト言ハヲ改ムルナリ 宇多の松原
ハ土佐ノ國何ノ郡ナルヤ何ノ地ナルヤ審ナラス案スルニ吉良
川ノ近辺ナランカ委クハ彼地ノ人ニ問ヘシいくそばく

ノ鶴ナトヨノルハ鶴ハ千年ニシテ蓋松ニ安スト云元そゐさうゝト云今毋項真崔白崔黒崔アリ朝鮮崔ハ對馬入ノ釜山浦ニテ捕ル所ノ朝鮮西土ニ食品トセストイヒ又琉球ニハ鶴ナシト云ヘリ奥州玉春ニ鶴石アリ鶴ノ化石トイヘリ日光山ニ豊太閤ノ放タレシ鶴ニ三羽野ニ四季トモニ居テ他ニ行カス鶴見ハ武藏國之崔カ岡ハ鎌倉ニ在リ新續古今集ニ

とゝ井まで〻ゝこゝろかけ
ろゝおもろのうゝ
あゝまのたつの音もたて
てぬま

宝永ノ主上新内裏ヘ遷幸ナラセ玉フ鳳輦ノ上ニパルカニ鶴ノ舞カケラルヲ諸臣千年ノ多シ下テ賀シ物シ奉ラレケルニ従一位前内大臣源通茂公

トハ松ノ立ヒタルヲ云何十本ト云意ナルヘシ いく千年へたりともゝ〻すトハ暗ニ松ノ色ノミトリナル幾千年ヒルヤト云意ヲ含ム もゝごゝトハ眞淵ハ木ノモトゴトナリト云宣永スルニ木ト云ヲ本ト云ハ吉野ノ櫻ヲ千本ノ櫻ト云ヲ如シカ葉ニハ鉾揖之本尓ドアリ 鶴とび うゝ等ゝハ季吟云とびくゝハ飛ちゞうゝなひゝハ 梶取まゝす船中の人なゝしし 松のうゝ北ト考証ニうゝれハうゝの轉シタルニテ松ノウラト云コトヽ解ス其證ハ万葉ニ未ノ字ヲうゝトヨミ又宇礼トモカクうれうゝ音カヨヘリ とゞハ書紀ニ奴知トカキ万葉ニ兵

ノ字ヲヨメリ此ノ処ノ意ハ鶴ト松ト千代ノ友ドチト思ウラントイヘルナリ この歌ハ等トハ舟人ノヨメル哥ナレハ処ノケシキヨリハ哥ハオトレリトナリ 鶴ハ和名抄卷十八云四聲字苑云鶴 何名久和名豆流 似鵠長啄高脚者也唐韻云鶴ハ鳥ノ音零陽氏抄ニ多豆今和俗謂鶴為葦鶴是也 按 鶴別名也

すゝハ栖也

かくあゝをえてこぎ出まゝ出も漕とゝれこれ
ぬふけゝあゝふゝえびゝゝてけのすこのぢとゝ
のゝてまこのそゝろをのこもなゝハぬいゝもわがそゝま
しゝゝゝ女をあなぞこゝろゝをゝきあゝゝ玉ぬのゝぞ

和哥のうらふきしへ
てすめるあし田鶴の
雲井尓ほるかふの
うれしさ
雲州消息下云記又
今所持来也夜部入
眼云云
万葉十一
朝茅原小野印空事
何在云公待
和訓栞巻十三云そら
おそれ。そらおそれけ
そらなげき。そらこ
と。そら耳。そら酔。そ
ら笑。そら寐。なのそ
ら音ナト云皆虚偽

なくかく見へバ舟ふこのぢらとりそふかくるこゝろさひて
ゐるとも おもへらバそれろくふみもく
まれ那るて ぞ詠ぞなく 己が吉て哉あて身を
きるしほんごるなと歌 やまとろん きうとのや
らやるんこの人や 哉歌の菜をそへごとをして おぎの
ゆつぎきとして 残もそてごん おのれざることこれな
とよおれのれどこのぞこるもとく 詠むらふきさて
海へてあれとれど んろてさてこしなぎぬのくゆかろう
して ころまてまていらりて おきぬれ人ひとるまたかめ
あるがならいたこちなふことしるそのもすぬしハ

ノ義也 そらなきハ
平仲カ故事也あし
のそら詠ナト云ハ
浮タル根ヲ云ナル
ヘシそら孫ニヨセ
タリ
○ふねハ舟船ヲ云羽ト
音義通セリ續記ニ飛
舟ミエ文選ニモ戰船
ヲ三翼トイヘリ漕船
刺船釣船繋キ船渡シ
船蜑小船捨小船波小
船棚無小船身分小船
ナトイヘリ渡船ハ居
家必用ニ見ユ蜑家
船ハ居公雜字ニミヘ
小船ハ正字通ニ見ヘ

でひそまりぬ
まよく ハ間ミくノ義ナリ 山も海も等トハ日カクレ
次第くニ山モ見ヘス海も見ヘス夜深テ西モ東モワカ
ラヌナリ てけハ天氣也宇津保物語ニ云天下ヲテケトヨ
メリ今ハ天氣ナリ日和ト云コト之 てけのことろちとり
まよふすトハ俗ニ云舟ニノレハ船頭ニマカセト云コトナリそ
おのこも等トハおのこハ男子ミソ男子ノ内ニモ海ニナレザル
人ハイトコヽロホソシ況シヤヨシ女ニヨヒテ方ヤコヽロホソキ
ハ推量スヘシ ふなそこまかしふをつきあつるハ舟ニ
酔トミレナルヘシ ふなうた等トハ住吉物語云クもきちりふ

タリ
ちうとちうとめハ
和訓栞巻十一ニ和名
抄ニ舅姑ヲヨメリ
傍人傍人女リ夷ナ
ルニヤそひ反シ也
日本記ニハ婚姻ヲ
むこちひとトヨメ
リ新撰字鏡ニ婚ヲ
ちひとトヨミ婦人
ノ父ト注セリ嫁嬪
媾共ちひとめトヨ
メリ

舟ヨのりくるものくものあやしきこゑくしてつまゐ
さこめぬきしの姫松とうわひてこきゆくもなくハ波
こちしてあれなり云く又云ク如きうりこぎく
る舟ヨハあやしきこゑそ聞くさひうけるなと
うくふとさすうくみとくうりけり云々漢土ニハ櫂
歌或ハ款乃トテアリ此等皆ふなうたナリ春の野
芽ノ意春ノ野ニテ若スキニ手ヲキルヲモイト
ハス音ニナキツヽミタル菜ヲトイヘルナリ「親やまゐ
るらんト原本ニアレト今ハ定家卿本拾葉本類従本
又ハ異本等ニヨリテ之ヲ改ムまぶるハむさぶるノ

尺素往来云於清貧
之身者餬予布脯貫
千村酒云云
周礼地官司市云以
泉府同貨而斂除註
云民無貨則賒貫而
予之
日本私記ニ老宿ヲ
フルヲキナト訓ス
枕草子ニ云そのり

略ニテ貧くんナリむさの反まもハヨノツカラまゐる
トナルナリ守津保藤原君云かこてふ〜たまくるゐ
とよまうきる物日まくちをなひとつ云々トアリ
土くとめトハ和名抄巻二云爾雅云夫之母曰姑和名之阜止女
没則曰先姑「うへトヤトハ季吟云くくくハのくふんや
といふこてろうやゑうこのふ〜なるく〜催馬樂ま
さきんごちやくうふまなく〜云々トアリ今云此説ノ
如くくふんやノやハツケテ云哥ノ節ナリコノ下ノ文ニ
くくハゞうくへる哥みもくくふやト云詞アリ照シテ合
セテ考レハ季吟ノ説善矣上南秋成モ舟哥ノハヤシ詞

こハふるるおもかる人たちもうちもてつゝそゝもうくゝもいとぬを云〻
負ハ俗作刀自和名抄老幼類云劉向列女傳云古語老母爲負漢書二五娼武負位引之今按俗人謂老女爲負字從目也今化以貝爲自款今按和名度也

ハトセリ　若部の菜を等トハ考証云クこの文諸本ヨ
なくゝてよんべのうなゐもぐなぜよゝゝル云〻とふ
文をのせてゝわうれ文をこの原本ヨ脱せしゝやとも
思へとよゝ〻考へ見ればもゝより別種の本とゑ
えゝわ又諸本ヨのせうる文もさぐうなゝずこの
本のごとくふてハ文字の数ハまちなれどうへり
諸本の本文すりもよゝきこゝろ意もゝゝうゐれバ
この本れうゝまきれうて尤この本れかゝ文とおれ
じき本資慶の本と異本れうちヨ一本ゑゝえ多象
そゝゝとハイッハリナリ　おぎのりハ新撰字鏡云

新撰樂記云野干坂伊賀尊之男祭叩蛇皆ヨ舞云云
宇治拾遺巻四云紙〻まハりてこれつゝミてまクりてこうめや子ちなぐまくそせんといひけれバ云〻
宣長云老女をなうめ〻いふハ姥のうつるふやあふんきてそのゝ〻めふ尊の字を用ふるハいうれる由ヨり詳ならぬもしくハ博

賒式耶反賈也於支乃利以呂波類抄云貰オキノル眇貸ルヒ上同上真淵云物をうりて代をやふてをくを云　なぐハ和訓栞
巻十九云丹後風土記ニ此處我心奈具志注ニ古語平善者云奈具志ト見ヘタリ平善ハ和也何氏語林ニ杜書記平善トイヘリ萬葉ニ心なゝやトヨメルモノ分ホシ伊勢物語ニ大淀れ濱ヨ生てふるかふに心ハなぎぬゝしてゝえねわも　おきなひとハ和名抄巻三云古老遊仙屈云古老和名於岐今按云古老又一云老旦一云日本紀云老宿同上　こうめハ和名抄巻二云專ヲサノ日本紀云專領ノ字讀大字女子佐女今按專ノ訓毛波良專一之義

也太宇女者毛波良之古語也今呼老女爲太宇女故次於
負耳次ノ文ニ淡路ノことうめトアリ是レト同人ナルヘシこ
こちハ心地ニシテコヽロヒチト云コトものもの〻玉
ハで食事ヲセヌヲ云ナリ上ノ文ニ女ハふなそこまうし
うをつきあて〻音のミそなくトアルト又こてちあ〻く
トアル文トニヨリテ考レハ食事セヌノ人舟ニ酔ヒタルナル
ヘシ真淵云ク物をえくへすしてねたるなあト評ノ白ク此
説ハ尋常ナリ舟ニ酔テ食事セヌト云ガハヤワカリナリ
ひそむハ和訓栞巻二十五六顰ノ字ヲヨメリひそうヨリ
轉セルナルヘシ眉ナドニイヘリ年老テロノスケムヲモイウタ

ヘハ云々

嚬字ナリ今ハ顰ノ字ナリ玉篇云ク顰蹙憂愁
不樂之狀也